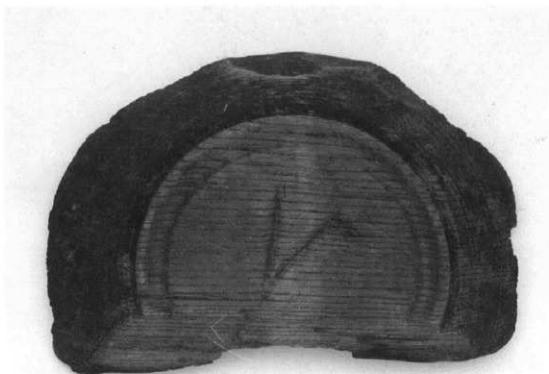


E N A I D A N I S I T E  
江 内 谷 遺 蹤

県営担い手育成基盤整備事業横市地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2003年3月

宮崎県都城市教育委員会



南からの遺跡遠景（上方：霧島山 中央：横市川 遺跡はやや下方）



東からの遺跡遠景（右下方：横市川 遺跡は中央）



真上からの遺跡中遠景（遺跡はやや下方）



真上からの遺跡全景



調査区東壁土層



調査区東壁土層  
(SW02範囲)



調査区東壁土層  
(中央のブロックは文明白ボラ)



調査区北壁土層



調査区北壁土層  
(S F 01土層断面)



調査区北壁土層  
(S D 02土層断面)



セクションNo.1 北壁土層



セクションNo.1 北壁土層  
(下方に木片群)



セクションNo.1 北壁土層  
(谷部への落ち際)



セクションNo.2 南壁土層



セクションNo.2 南壁土層  
(SW02範囲)



セクションNo.2 南壁土層  
(SW01範囲)



セクションNo.3 南壁土層



同 上



セクションNo.3 南壁土層  
(SW02範囲)



排水兼土層観察溝南壁土層  
(東から)



排水兼土層観察溝南壁土層  
(西から)



排水兼土層観察溝南壁土層  
(画面右中段は白色化した赤ホヤ)



排水兼土層観察溝東壁土層  
(南から)



排水兼土層観察溝東壁土層  
(北から)



排水兼土層観察溝東壁土層  
(画面中央は白色化した御池ボラ)

## 序 文

この報告書は、県営扱い手育成基盤整備事業横市地区に伴い、都城市教育委員会が受託事業として実施した都城市蓑原町字江内谷に所在する江内谷遺跡の発掘調査報告書であります。

平成12年12月から平成13年3月にかけて実施した発掘調査の結果、縄文時代から近世にかけての遺物が多数出土し、又、古代から近世にかけての遺構が発見されました。

当遺跡の周辺では、中尾山遺跡・馬渡遺跡・坂元A遺跡・坂元B遺跡の調査がおこなわれ、各遺跡から歴史的に大変貴重な資料が得られております。また今後も当地区に於いて、基盤整備事業に伴った発掘調査が予定されており、多大なる成果が得られるものと思われます。

本書は、失われていく貴重な文化財を記録保存し、後世に残していくことを目的として作成しました。また、本書が郷土の歴史研究および学校教育現場で、活用されることを願っています。

最後に、発掘作業に従事していただいた作業員の皆様をはじめ、調査に協力していただいた関係機関の皆様にお礼を申し上げます。

平成15年3月

宮崎県都城市教育委員会

教育長 北村秀秋

## 例　　言

1. 本書は県営担い手育成基盤整備事業横市地区に伴い、平成12年度に実施した江内谷遺跡発掘調査の報告書である。
2. 本書に掲載した遺構実測図は、現地での実測を、三島淑子・木村典子・吉村則子・阿久根トシェ・中原貞良・立山君子の助力を得て、下田代清海が行い、製図は下田代清海が行った。
3. 現地での遺物取り上げおよび遺物分布図作成において、(株)テクノシステムの遺跡調査システム "SITE II" を使用した。
4. 本書に用いた方位は、特に注記のないかぎり座標北G.N(国土調査法第II座標系)を指している。
5. 遺構・遺物の写真撮影は、下田代清海が行った。
6. 空中写真撮影は、九州航空株式会社に委託した。
7. 自然科学分析を(株)古環境研究所に委託した。
8. 本書に掲載した遺物実測図は、水光弘子・奥利根子・伊鹿倉康子・徳楽有子が作成し、チェック及びトレースは下田代清海が行った。
9. 木製品の実測図は木目・腐蝕状況など省略し、木取りについては、断面図に年輪方向を模式的に図示した。
10. 出土遺物の保存処理を(株)吉田生物研究所に委託した。
11. 土層断面および土器の色調は、『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)に掲った。
12. 本書の執筆・編集は下田代清海が行った。
13. 本書に用いた略記号は次の通りである。

E U D - 江内谷遺跡	S B - 堀立柱建物	S C - 土坑	S D - 溝状遺構	S E - 井戸
S F - 道路状遺構	S W - 水田跡	T T - サブトレンチ	T - 調査前試掘トレンチ	
14. 出土遺物・写真・図面記録等は、都城市教育委員会で保管している。

# 本文目次

## 第Ⅰ章 序説

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第Ⅲ章 調査報告

1. 調査概要	4
2. 遺構所見	10
3. 遺物所見	19

### 第Ⅳ章 自然科学分析調査報告

1. 江内谷遺跡の土層とテフラ	84
2. 江内谷遺跡におけるプラント・オパール分析	88
3. 放射性炭素年代測定	93
4. 種実同定	95
5. 都城市江内谷遺跡出土木製品の樹種調査結果	98

## 第Ⅴ章 小結

1. 遺物の考察	100
2. 遺構の考察	101
3.まとめ	102
4.あとがき	104
5.参考文献	104

# 挿図目次

第1図	周辺遺跡位置図(1/25000)	2
第2図	江内谷遺跡周辺地形図(1/2500)	3
第3図	江内谷遺跡土層断面図(1)	5
第4図	江内谷遺跡土層断面図(2)	7
第5図	江内谷遺跡グリッド配置図(1/1000)	9
第6図	江内谷遺跡遺構配置図	11
第7図	遺構(S D01)実測図	13
第8図	遺構(S D01・S F01)実測図	14
第9図	遺構(S D02・03・04・05)実測図	15
第10図	遺構(S L01・02)(S C01・02・03)(S E01)実測図	16
第11図	出土遺物分布状況図(1/200)	17
第12図	S D01出土遺物実測図(1)	20
第13図	S D01出土遺物実測図(2)	21
第14図	S D02出土遺物実測図(1)	22
第15図	S D02出土遺物実測図(2)	23
第16図	S D02出土遺物実測図(3)	24
第17図	S D02出土遺物実測図(4)	25
第18図	S D02出土遺物実測図(5)	27
第19図	S D03・04・05, S F01出土遺物実測図	27
第20図	包含層〔第VII～X III層〕出土 繩文土器実測図(1)	28
第21図	包含層〔第VII～X III層〕出土 繩文土器実測図(2)	29
第22図	包含層〔第VII～X III層〕出土 土師器〈环〉実測図(1)	30
第23図	包含層〔第VII～X III層〕出土 土師器〈环〉実測図(2)	31
第24図	包含層〔第VII～X III層〕出土 土師器〈环〉実測図(3)	32

第25図	包含層 [第VII～X III層] 出土 土師器〈壺〉実測図(4) .....	33
第26図	包含層 [第VII～X III層] 出土 土師器〈壺〉実測図(5) .....	34
第27図	包含層 [第VII～X III層] 出土 土師器〈壺・瓶〉実測図 .....	35
第28図	包含層 [第VII～X III層] 出土 土師器〈高台付壺〉実測図(1) .....	36
第29図	包含層 [第VII～X III層] 出土 土師器〈高台付壺〉実測図(2) .....	37
第30図	包含層 [第VII～X III層] 出土 土師器〈皿〉実測図 .....	38
第31図	包含層 [第VII～X III層] 出土 土師器〈甕〉実測図(1) .....	38
第32図	包含層 [第VII～X III層] 出土 上師器〈甕〉実測図(2) .....	39
第33図	包含層 [第VII～X III層] 出土 土師器〈甕〉実測図(3) .....	40
第34図	包含層 [第VII～X III層] 出土 土師器〈甕〉実測図(4) .....	41
第35図	包含層 [第VII～X III層] 出土 土師器〈甕・鍋・他〉実測図 .....	42
第36図	包含層 [第VII～X III層] 出土 黒色土器A類実測図 .....	43
第37図	包含層 [第VII～X III層] 出土 黒色土器B類実測図 .....	44
第38図	包含層 [第VII～X III層] 出土 土師器〈墨書き〉実測図 .....	45
第39図	包含層 [第VII～X III層] 出土 土師器〈刻書き〉実測図 .....	45
第40図	包含層 [第VII～X III層] 出土 土師器〈防錆車〉実測図 .....	46
第41図	包含層 [第VII～X III層] 出土 上師器〈焼塙壺〉実測図(1) .....	46
第42図	包含層 [第VII～X III層] 出土 上師器〈焼塙壺〉実測図(2) .....	47
第43図	包含層 [第VII～X III層] 出土 須恵器実測図 .....	48
第44図	包含層 [第VII～X III層] 出土 東播系須恵器 .....	49
第45図	包含層 [第VII～X III層] 出土 越州青磁実測図 .....	50
第46図	包含層 [第VII～X III層] 出土 緑釉陶器実測図 .....	50
第47図	包含層 [第VII～X III層] 山土 白磁・青白磁実測図 .....	50
第48図	包含層 [第VII～X III層] 出土 鋼治関連〈フィゴの羽口・鍛冶溝〉実測図 .....	51
第49図	包含層 [第VII～X III層] 出土 木製品〈曲物〉実測図 .....	53
第50図	包含層 [第VII～X III層] 出土 木製品〈挽物・刀子形・蓋板・他〉実測図 .....	54
第51図	包含層 [第VII～X III層] 出土 木製品〈部材・樹皮〉実測図 .....	55
第52図	包含層 [第VII～X III層] 出土 滑石製品〈石鏡〉実測図 .....	56
第53図	包含層 [第VII～X III層] 出土 石製品〈砥石〉実測図 .....	58
第54図	包含層 [第VII～X III層] 出土 土製品〈鏡〉実測図 .....	58
第55図	包含層 [第VII～X III層] 出土 軽石製品〈用途不明〉実測図 .....	58
第56図	包含層 [第VII～X III層] 出土 石器実測図(1) .....	59
第57図	包含層 [第VII～X III層] 出土 石器実測図(2) .....	60
第58図	包含層 [第VII～X III層] 出土 石器実測図(3) .....	61
第59図	表土剥ぎ一括 [第I～V層] 出土遺物実測図 .....	62

## 図 版 目 次

口絵 1	南からの遺跡遠景、東からの遺跡遠景 [カラー]	
口絵 2	真上からの遺跡中遠景、真上からの遺跡全景 [カラー]	
口絵 3	調査区東壁土層 [カラー]	
口絵 4	調査区北壁土層 [カラー]	
口絵 5	セクション№1 北壁土層	
口絵 6	セクション№2 南壁土層	
口絵 7	セクション№3 南壁土層	
口絵 8	排水兼土層觀察溝南壁土層	
口絵 9	排水兼土層觀察溝東壁土層	
第1図版	調査前遺跡全景、調査前確認調査風景 .....	105
第2図版	発掘調査風景、調査区外東側旧地形状況、木器(Ⅲ)出土状況 .....	106

第3図版	S D01西端部土層断面、S D01・S C03切り合い上層断面、S D01中央部土層断面	107
第4図版	S D01・S W01の切り合い状況、S D01・S W01切り合い土層断面、S D01完掘状況	108
第5図版	S D01完掘状況、S D01内遺物出土状況	109
第6図版	S D02中央部土層断面、S D02南端部土層断面、S D02・S D03切り合い土層断面	110
第7図版	S D02・S W01切り合い土層断面、S D02完掘状況	111
第8図版	S D02完掘状況、S D02内遺物出土状況	112
第9図版	S D03・04切り合い土層断面、S D04土層断面、S D04・S W01切り合い土層断面	113
第10図版	S D05土層断面、S C01土層断面、S C01完掘状況	114
第11図版	S C02土層断面、S C02完掘状況、グループBピット土層断面	115
第12図版	S B01全景、S B01ピット完掘状況	116
第13図版	S E01土層断面、S E01掘り下げ状況、S E01完掘状況	117
第14図版	杭列全景、杭列北側部分近景、杭列南側部分近景	118
第15図版	S F01土層断面、S F01・S D01切り合い土層断面、S F01全景	119
第16図版	砥石出土状況、墨書き土器出土状況、綠釉陶器出土状況	120
第17図版	木器(曲物)出土状況、樹皮出土状況、フイゴ羽口出土状況	121
第18図版	縄文土器	122
第19図版	縄文土器	123
第20図版	縄文土器	124
第21図版	縄文土器・石器	125
第22図版	石器	126
第23図版	石器	127
第24図版	石器・土師器(坏)	128
第25図版	土師器(坏)	129
第26図版	土師器(坏)	130
第27図版	土師器(坏)	131
第28図版	土師器(坏)	132
第29図版	土師器(坏)	133
第30図版	土師器(坏)	134
第31図版	土師器(坏)	135
第32図版	土師器(坏)	136
第33図版	土師器(坏)	137
第34図版	土師器(坏)	138
第35図版	土師器(坏)	139
第36図版	土師器(坏)	140
第37図版	土師器(坏)	141
第38図版	土師器(坏)	142
第39図版	土師器(坏・碗)	143
第40図版	土師器(坏・碗)	144
第41図版	土師器(坏か碗・高台付碗)	145
第42図版	土師器(高台付碗)	146
第43図版	土師器(高台付碗)	147
第44図版	土師器(高台付碗・皿)	148
第45図版	土師器(皿・甕)	149
第46図版	土師器(甕)	150
第47図版	土師器(甕)	151
第48図版	土師器(甕・甑)、土師質(壺?・鍋)、手捏土器	152
第49図版	黒色土器A類	153
第50図版	黒色土器A・B類	154
第51図版	黒色土器B類、墨書き土器	155
第52図版	墨書き土器	156

第53図版	墨書き土器	157
第54図版	墨書き土器、刻書き土器	158
第55図版	刻書き土器、上師器(紡錘車)	159
第56図版	上師器(焼塙壺)	160
第57図版	須恵器	161
第58図版	須恵器	162
第59図版	東播系須恵器、鍛冶関連(フイゴの羽口)	163
第60図版	鍛冶関連(フイゴの羽口・鍛治津)	164
第61図版	鍛冶関連(鍛治津・塔塔)、木製品(曲物)	165
第62図版	木製品(曲物・挽物)	166
第63図版	木製品(挽物・刀子形・蓋板・部材・他)	167
第64図版	木製品(部材・樹皮)	168
第65図版	滑石製品(繩)	169
第66図版	滑石製品(端)、土製品(鍾)	170
第67図版	石製品(砥石)、慄石製品	171
第68図版	縄釉陶器	172
第69図版	越州青磁	173
第70図版	越州青磁	174
第71図版	越州青磁、白磁、青白磁	175

## 表 目 次

表 1	基本層序表	7
表 2	掲載遺物観察表(1)	64
表 3	掲載遺物観察表(2)	65
表 4	掲載遺物観察表(3)	66
表 5	掲載遺物観察表(4)	67
表 6	掲載遺物観察表(5)	68
表 7	掲載遺物観察表(6)	69
表 8	掲載遺物観察表(7)	70
表 9	掲載遺物観察表(8)	71
表10	掲載遺物観察表(9)	72
表11	掲載遺物観察表(10)	73
表12	掲載遺物観察表(11)	74
表13	掲載遺物観察表(12)	75
表14	掲載遺物観察表(13)	76
表15	掲載遺物観察表(14)	77
表16	掲載遺物観察表(15)	78
表17	掲載遺物観察表(16)	79
表18	掲載遺物観察表(17)	80
表19	掲載遺物観察表(18)	81
表20	掲載遺物観察表(19)	82
表21	掲載遺物観察表(20)	83

# 第Ⅰ章　序　　説

## 1. 調査に至る経緯

宮崎県都城市横市地区では、平成5年度に県営は場整備事業（平成9年度より県営扱い手育成基盤整備事業に移行）の実施が採択された。平成6年度、宮崎県北諸県農林振興局から文化財の所在の有無について照会を受けた宮崎県文化課が一帯の分布調査を実施したところ、事業対象区域約170ha内において10遺跡、約44haにおよぶ埋蔵文化財包蔵地の所在が推定された。その後、都城市教育委員会は宮崎県文化課が実施した試掘調査の結果を受けて、北諸県農林振興局と協議を行い、平成8年度から鶴喰遺跡の調査を皮切りとして、緊急の発掘調査を実施している。平成12年度は、馬渡遺跡の東側一帯を含めた約9haの、ほ場整備事業が計画されていた為、その範囲内について、平成11年度の宮崎県教育委員会による確認調査の際に把握されていた遺跡の範囲と工事計画とを照らし合わせた結果、江内谷遺跡に影響があることが判明し、破壊を受ける部分については、記録保存の措置を講ずることになり、発掘調査を実施した。

## 2. 調査の組織

調査主体	都城市教育委員会	教育長	長友久男（～平成14年6月） 北村秀秋（平成14年7月～）
調査総括	都城市教育委員会文化課	課長	内村一夫（平成12・13年度） 井尻賢治（平成14年度）
	都城市教育委員会文化課	課長補佐	盛満和男（平成12年度） 坂元昭夫（平成13・14年度）
	都城市教育委員会文化課文化財係	係長	堀之内克大（平成12年度） 奥田正幸（平成13年度） 松下述之（平成14年度）
庶務担当	都城市教育委員会文化課文化財係	主査	桑畑光博
調査担当	都城市教育委員会文化課文化財係	嘱託職員	下田代清海
調査作業	永田澄利・嶋木正・岩切数秋・福岡悦雄・山口一夫・岩本泉・田中育子・木村典子 山添みどり・福岡咲子・山村ゆう子・大山ミツ子・横口みどり・三島淑子		
整理作業	水光弘子・奥利根子・伊鹿倉康子・徳楽有子・児玉信子・吉留優子・丸崎千鶴子 前田町子・渡司ちさ子		

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

江内谷遺跡は、宮崎県都城市蓑原町字江内谷に所在する。都城市は行政的には、宮崎県の西南端にあり、北西に霧島山系、東から南を鶴塚山地に囲まれ、西南方向のみがわずかに開かれた都城盆地の中心に位置し、大淀川が各支流を集めながら、市の中央を貫く形で南から北へと流れている。本遺跡は、大淀川支流の一つである横市川南岸、開折扇状地の扇頂部、北緯 $31^{\circ} 44' 14''$ ・東経 $131^{\circ} 01' 27''$  標高約150mに位置する。市街地から北西方向に約4.4kmの所である。当該地は、元来、横市川南岸の河岸段丘であった台地が開析され、谷地形および扇状地を形成したものと思われ、その谷は本遺跡より南南西約1.0kmの所まで確認できる。

次に、遺跡周辺の歴史的環境に目を向けると、江内谷遺跡の西側、舌状に張り出した台地上に立地する中尾山・馬渡遺跡がある。当遺跡からは、縄文時代後・晚期・弥生時代中期～古墳時代・歴史時代の遺物が出土し、縄文時代晚期および平安時代末から近世にかけての構造が確認されている。地形的にみて、江内谷遺跡と中尾山・馬渡遺跡は歴史的関係があるのでないかと推測される。

横市川流域には、江内谷遺跡も含め、数多くの遺跡が点在している。それらの遺跡からは、縄文時代から近世にかけての集落・水田跡などが確認されており、この横市川流域は各時代において、生活域・生産域とその様相を変えながら、人々の生活が連続と営まれていた事がうかがえる。



第1図 周辺遺跡位置図 (1/25000)



第2図 江内谷遺跡周辺地形図 (1/2500)

## 第Ⅲ章 調査報告

### 1. 調査概要

2000年11月7日～11月8日の二日間にわたり、地形・土層確認および調査区域の再確定を目的とした試掘を本調査前に実施した。結果、調査対象区域の南側は、地表面からの深さ約0.2～0.3mまでが現在の畑地耕作土、深さ約0.7～1.2mまでが造成土（昭和30年代の耕地整理）、深さ約0.9～1.4mまでが現代の水田耕作土であり、その直下には竹製の排水管（水田の水はけをよくする為と思われる）が埋設してあり、その下約10cm位の所から湧水がはじまり、それ以上の掘削は不可能であった。以上のデータを検討し、湧水レベルより下部の調査は困難であると思われ、調査経費節減および調査期間の短縮を考え、当初の調査予定範囲面積約3100m<sup>2</sup>のうち南側部分を除いた約1400m<sup>2</sup>を調査区域とし、本調査を実施した。

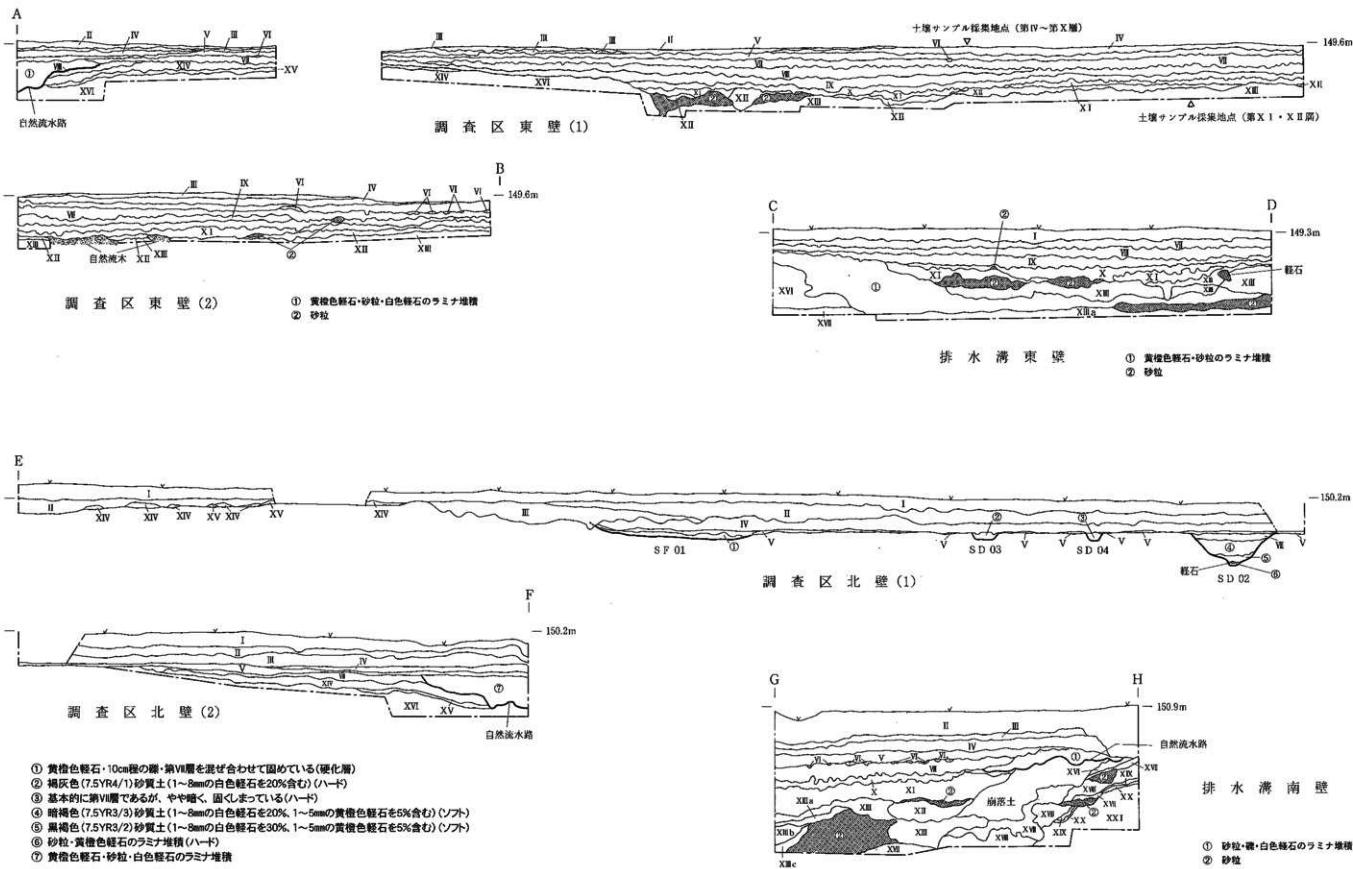
本調査は、2000年11月24日より開始した。

まず、表土剥ぎと同時に、重機によって調査区の周囲に、土層観察も兼ねた排水溝および貯水池の掘削を行った。これは、調査区内の地下水レベルを下げ、後の人力による遺物包含層掘り下げを容易にする為と、雨水により調査区内が水没する事を予想しての対策であった。表土剥ぎは、第Ⅰ層～第V層までの、現水田耕作土・昭和30年代の耕地整理に伴う造成土・文明白ボラ降灰以降の水田耕作土を重機により除去した。結果、調査区の西側1/3は、昭和の耕地整理で削平されており、旧地形をとどめておらず、又、東側2/3は、近世の水田耕作によりそれ以前の造構は、破壊を受けている可能性があった。そして、南東部には、南西方向から北東方向への谷が走っており、その谷部には河川堆積物が層を形成しているという状況であった。尚、谷部の基本土層断面の各所にある砂粒ブロックは、扇状地の先端部によくみられる樹枝状の細い流水路跡である。

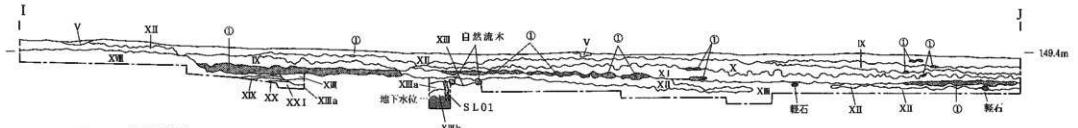
次に、人力により第VII層～第XII層（一部第XIII層）の遺物包含層掘り下げを行い、縄文時代～中世にかけての遺物が出土した。その内訳は、縄文・弥生土器約4100点、土師器（黒色・布痕・墨書き・線刻含む）約32000点、須恵器約900点、陶磁器（国産・舶載）約100点、木製品（未製品含む）約200点、銀冶関連遺物約80点、土・石製品約50点、軽石（加工痕あり）約650点、炭化物（木材・種子など）約50点、石器約110点の総数約38000点余りである。また、第XV層上面で造構検出を行い、溝状造構6条・道路状造構1本・土坑3基・井戸1基・掘立柱建物1棟・杭列1を検出し、土層断面で水田跡（古代・中世・近世）を確認した。

調査記録の為、第II座標系に乗じた10mグリッドを設定し、便宜上南から北へ算用数字1, 2, 3, …、西から東へアルファベットA, B, C, …でグリッドを呼称した。

2001年3月29日を以て、調査を終了した。

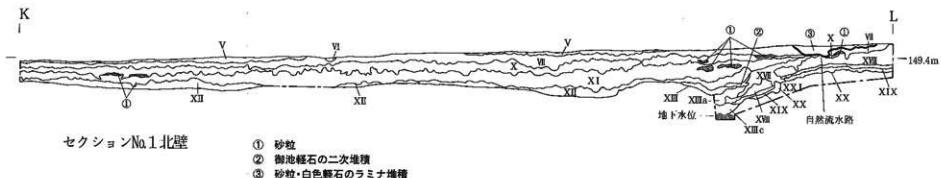


第3図 江内谷遺跡 土層断面図(1)



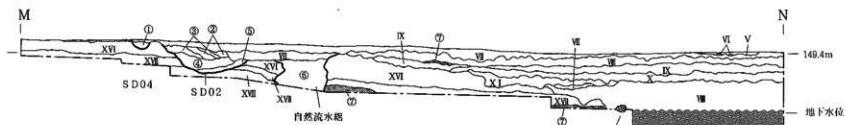
セクションNo.2南壁

① 砂粒



セクションNo.1北壁

- ① 砂粒
- ② 微泡輕石の二次堆積
- ③ 砂粒・白色輕石のラミナ堆積



セクションNo.3南壁

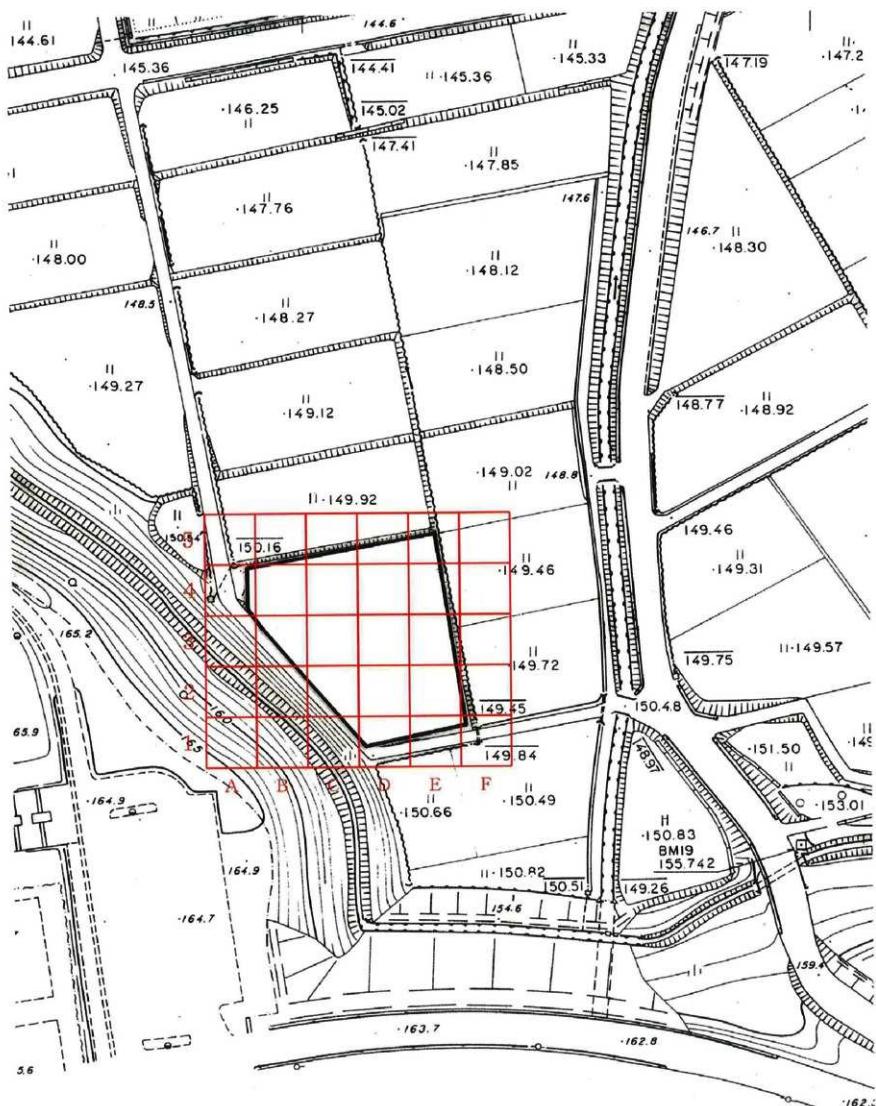
- ① 島灰褐色 (7.5YR4/2) 砂質土 (1~10mmの白色輕石を30%、1~10mmの黃褐色輕石を5%含む) (ややハード)
- ② 衛池輕石の二次堆積
- ③ 島褐色 (7.5YR3/3) 砂質土 (1~8mmの白色輕石を20%、1~5mmの黃褐色輕石を5%含む) (ソフト)
- ④ 黒褐色 (7.5YR3/2) 砂質土 (1~8mmの白色輕石を30%、1~5mmの黃褐色輕石を5%含む) (ウツ)
- ⑤ 砂層 (1~10mmの白色輕石を30%、1~5mmの黃褐色輕石を5%含む) (ハード)
- ⑥ 砂粒・黃褐色輕石・白色輕石のラミナ堆積
- ⑦ 砂粒



第4図 江内谷遺跡 土層断面図 (2)

表1 基本層序表

土色・土質	含有物	しまり	備考
I 黄褐色土		ソフト	現代水田耕作土(昭和38年以前)
II 反濾土・黑褐色・黄褐色輕石		ソフト	耕作堆積成土(昭和38年)
III 島灰褐色 (7.5YR5/1) 砂質土	1~10mmの白色輕石を10%含む (難化度が赤根付に達する)	ソフト	河成堆積物 (147年) 以前の水田耕作土
IV 島灰褐色 (7.5YR4/1) 砂質土	1~10mmの白色輕石を20%含む (難化度が赤根付に達する)	ソフト	河成堆積物 (141年) 以前の水田耕作土
V 島灰褐色 (7.5YR3/1) 砂質土	1~10mmの白色輕石を30%含む (難化度が赤根付に達する)	ハード	河成堆積物 (141年) 以前の水田耕作土
VI 白色 (10YR7/1) 輕石		やや	河成堆積物 (141年)
VI 黄褐色 (7.5YR4/2) 砂質土	1~10mmの白色輕石を30%、1~10mmの黄褐色輕石を5%含む (難化度が赤根付に達する)	ハード	河成堆積物 (中世水田耕作土)
VII 黄褐色 (7.5YR2/2) 砂質土	1~10mmの白色輕石を30%、1~10mmの黄褐色輕石を5%含む (難化度が赤根付に達する)	ソフト	河成堆積物 (プラント・パイル堆出)
IX 黄褐色 (7.5YR3/2) 砂質土	1~10mmの白色輕石を30%、1~10mmの黄褐色輕石を5%含む (難化度が赤根付に達する)	ソフト	河成堆積物 (プラント・パイル堆出)
X 黄色 (2YR7/2) 砂質土	1~10mmの白色輕石を10%、1~10mmの黄褐色輕石を5%含む (難化度が赤根付に達する)	ソフト	河成堆積物 (中世水田耕作土)
X I 黄褐色 (7.5YR4/2) 砂質土	1~10mmの白色輕石を20%、1~10mmの黄褐色輕石を5%含む (難化度が赤根付に達する)	やや	河成堆積物 (中世水田耕作土)
X II 黄褐色 (SYR2/2) 砂質シルト	1~10mmの白色輕石を30%、1~10mmの黄褐色輕石を20%含む (難化度が多量達する)	ハード	河成堆積物 (プラント・パイル堆出)
X III 砂粒・礫 (5~50mm) の混合層		ハード	河床堆積物 (土石混在堆積)
X III a 黄色 (7.5YR4/2) 砂質シルト	1~10mmの白色輕石を5%、1~10mmの黄褐色輕石を5%含む	ソフト	河成堆積物
X III b 砂粒・礫 (5~20mm) の混合層	1~10mmの白色輕石を2%、1~10mmの黄褐色輕石を2%含む	ハード	河床堆積物 (土石混在堆積)
X III c 黄色 (7.5YR2/1) 砂質シルト	1~10mmの白色輕石を2%、1~10mmの黄褐色輕石を2%含む	ソフト	河成堆積物
:			
:			
:			
X IV 黄色 (10YR2/1) シルト	1~10mmの黄褐色輕石を20%含む	ソフト	
X V 黄灰・灰可溶の混合層		やや	
X VI 黄褐色 (10YR7/1) 黑縫土 (一部白化)		ハード	堆積物
X VII 黄褐色 (7.5YR2/2) 黑縫シルト		ソフト	難化輕石 (一部地下水の影響により白色化)
X VIII 黄褐色 (10YR8/2) 灰巖土		ソフト	アカヒサ岩山 (地下水の影響により白色化)
X IX 黄褐色 (10YR8/2) 黑縫土		ソフト	火山灰岩 (地下水の影響により白色化)
X X 黄褐色 (4YR3/1) 黑縫土		ハード	牛のね山 (山皮下部)
X XI 黄褐色 (10YR8/1) 次山灰土	フジナイトに砂粒混入	ソフト	A1層の二次堆積



第5図 江内谷遺跡グリッド配置図 (1/1000)

## 2. 遺構所見

### S B 01 堀立柱建物 (第6・7図)

1間(約2.3m)×2間(約5.7m)の建物で、直径40cm～70cm・深度25cm～45cm(いずれも検出面基準)の柱穴で構成され、棟軸はG.N(グリッド北)より西へ約45°振っている。但し、北側は調査区外へ延びていたと思われるが、現代の耕地整理によって削平されており、東側も延びる可能性があるが、近世の水田開発によって削平されており、実際の規模は不明である。出土遺物はなし。

### S D 01・02・03・04・05 潟状遺構 (第6・8・9図)

S D 0 1は、全長約23mで東西に走向しており、最大幅1.5m・最小幅0.6m・最大深度57cm・最小深度10cm・比高差8cm(いずれも検出面基準)で、東から西へ傾斜している。また、二段掘りの様な断面形状を呈しており、下段の侧面および底面には、酸化鉄の沈着がみられる。主な出土遺物は、土師器(壺・高台付碗・甕)、須恵器(甕)、製塙土器、鍛冶関連遺物(フイゴの羽口・坩堝・椀形鍛冶炉)などである。

S D 0 2は、全長約17mで南北に走向しており、最大幅2.0m・最小幅1.7m・最大深度75cm・最小深度65cm・比高差5cm(いずれも検出面基準)で、北から南へ傾斜している。主な出土遺物は、土師器(壺・高台付碗・甕)、須恵器(甕・鉢・壺・瓶)、黒色土器A類、墨書き土器、製塙土器、綠釉陶器(洛西型9世纪第3四半期)、越州青磁(第II類)、鍛冶関連遺物(フイゴの羽口・椀形鍛冶炉)などである。

S D 0 3は、全長約9mで東西に走向しており、最大幅0.6m・最小幅0.45m・最大深度15cm・最小深度3cm・比高差2cm(いずれも検出面基準)で、東から西へ傾斜している。主な出土遺物は、土師器(甕)などである。

S D 0 4は、全長約18mで南北に、S D 0 2と併走する様に走向しており、最大幅0.6m・最小幅0.4m・最大深度22cm・最小深度5cm・比高差3cm(いずれも検出面基準)で、南から北へ傾斜している。主な出土遺物は、須恵器(甕)などである。

S D 0 5は、全長約6mで南北に走向しており、最大幅0.45m・最小幅0.25m・最大深度4cm・最小深度1cm・比高差6cm(いずれも検出面基準)で、南から北へ傾斜している。主な出土遺物は、土師器(壺)などである。

### S C 01・02・03 土坑 (第6・10図)

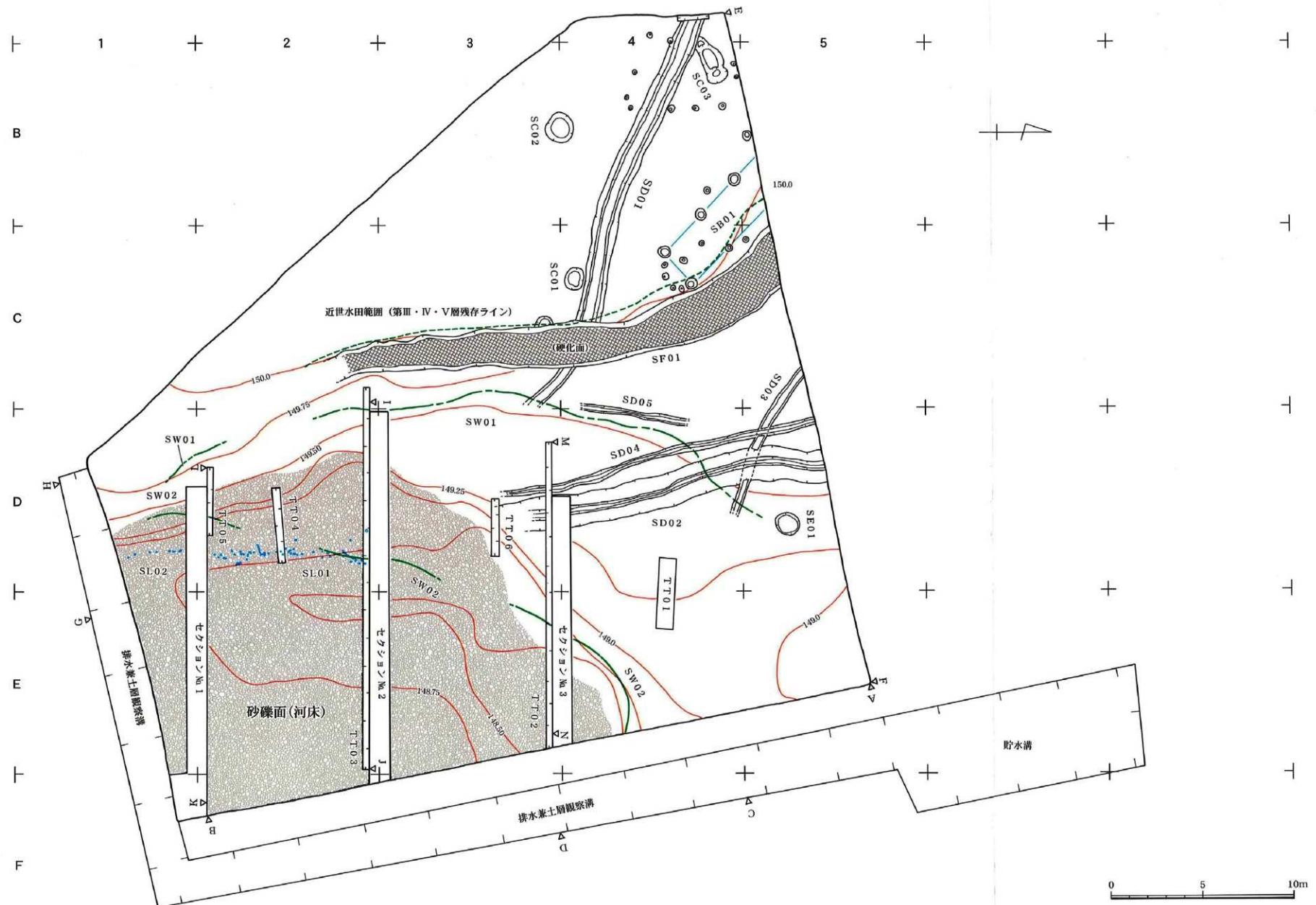
S C 0 1は長径1.25m×短径1.00m×最大深度26cm(いずれも検出面基準)の平面、不整梢円形である。出土遺物は特になし。

S C 0 2は長径1.70m×短径1.50m×最大深度35cm(いずれも検出面基準)の平面、不整円形である。出土遺物は特になし。

S C 0 3は長径2.60m(推定)×短径0.75m×最大深度45cm(いずれも検出面基準)の平面、不整長梢円形であり、S D 0 1に切られている。出土遺物は特になし。

### S E 01 井戸 (第6・10図)

長径1.24m×短径1.08m×最大深度1.66m(いずれも検出面基準)の平面、ほぼ円形である。上面から約50cmより下位の壁面には酸化鉄の沈着がみられ、当時の最高水位が推定できる。また、底には約10cmの厚さで、黄褐色輕石(御池降下輕石)が堆積しており、單一層で他に混入物がない事と非常に固くしまっ



第6図 江内谷遺跡 遺構配置図

ていた事を考慮すると、人工的に敷き詰められていた可能性が高いと考える。主な出土遺物として、面取り加工が施された、10~25cm大の軽石10数個が底面から約70cmの同一レベルから一面に散乱した状態で出土した。井戸を埋める際に、投げ込まれたものと推測される。

#### S F 01 道路状遺構（第6・8図）

全長約26mで南北に走向しており、最大幅2.8m・最小幅1.6m・比高差16cm(いずれも検出面基準)で、南から北へ傾斜している。主な出土遺物は、須恵器(壺)・黒色土器A類(高台付椀)・縄文土器(深鉢)などであったが、これらは全て、流れ込みによる二次的移動遺物と思われる。

#### S L 01・02 杣列（第6・10図）

便宜上、2つに分けたが、同一の杭列であり、全長約14mで南北に走向している。直径4~5cmの杭で構成され、交互に並んで打ち込まれている。尚、杭は先端部しか残っておらず、地下水位以下の部分だけが、腐食せずに遺存したのであろう。

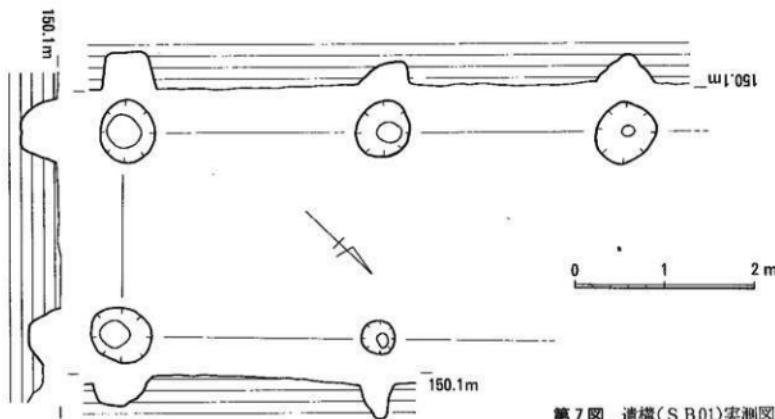
#### S W 01・02 (近世水田範囲) 水田跡（第6図）

S W 01は、西から東へ拡がる第VII層期の水田跡であるが、近世の水田開発による削平や耕作の影響の為、正確な水田区画および畦畔は不明であり、水田耕作範囲のラインである。

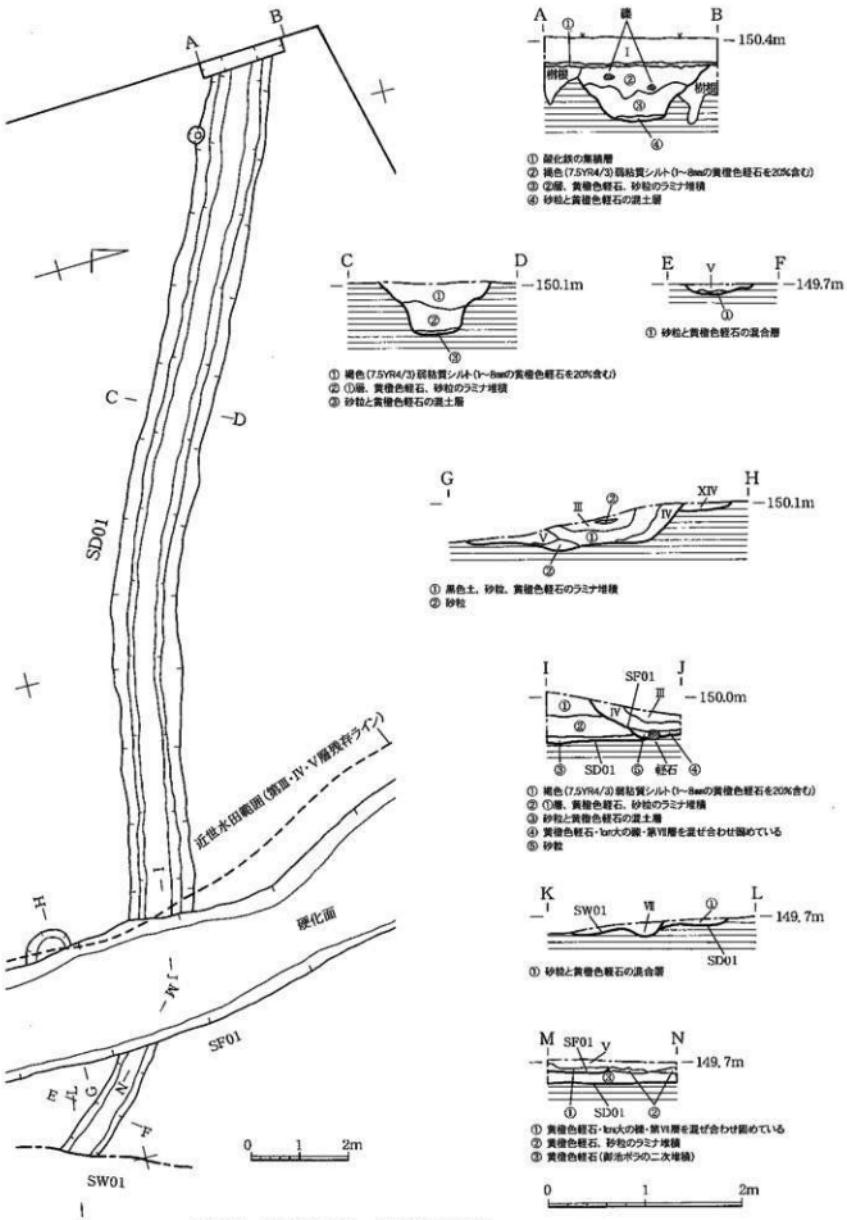
S W 02は、西から東へ拡がる第X層期の水田跡である。平面的に水田区画をとらえる事は不可能であったが、上層断面で畦畔の痕跡を数ヶ所確認でき、それらを結んだ水田耕作範囲ラインである。

(近世水田範囲)は、中世~近世の水田耕作土(主として近世)である第III・IV・V層の残存範囲であり、西から東へ拡がるが、西側は昭和の耕地整理により削平を受けており、また全体を第V層まで重機により除去した為、一部しか残存せず、北壁土層断面とあわせて想定したラインである。

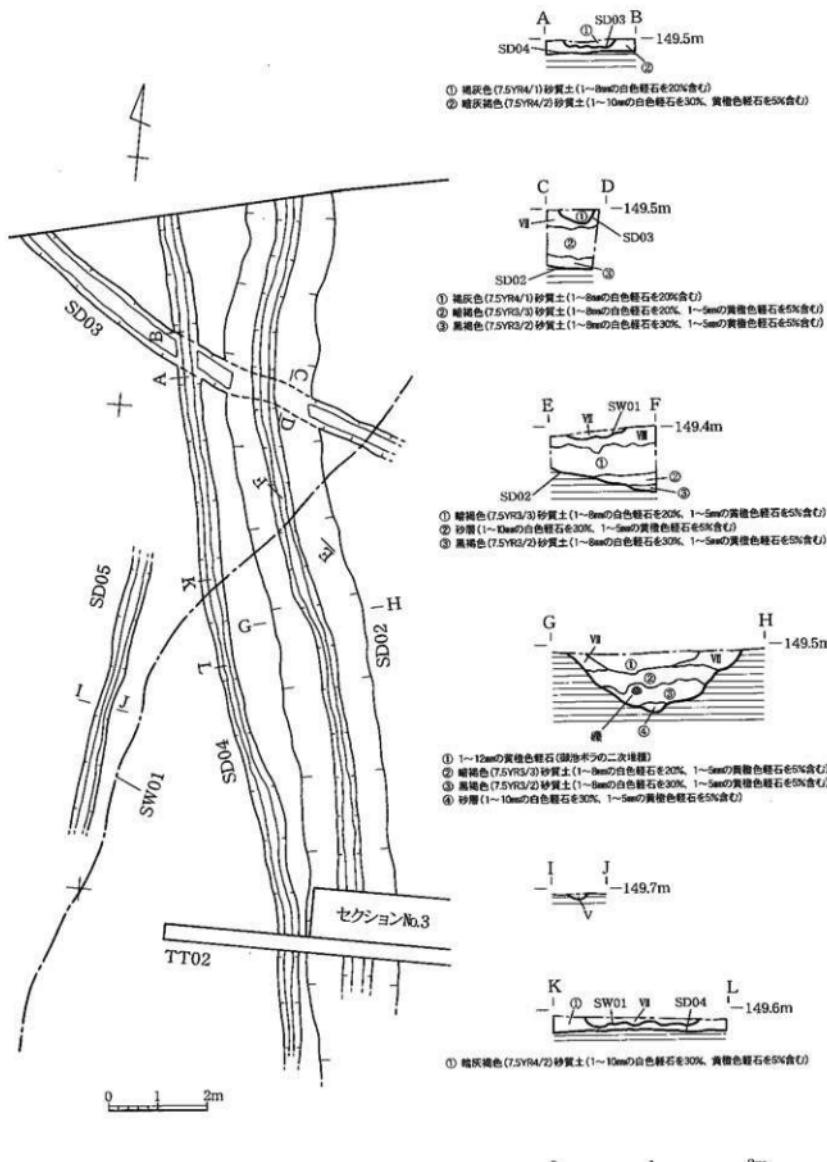
上記の各遺構の年代・時期などについては、「第V章 2. 遺構の考察」で述べている。



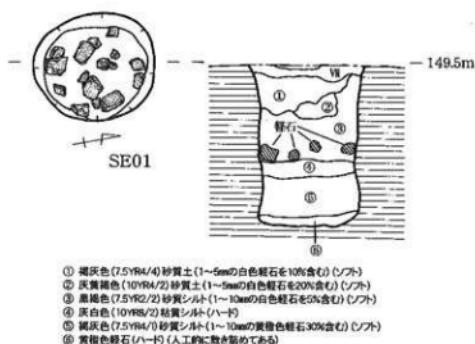
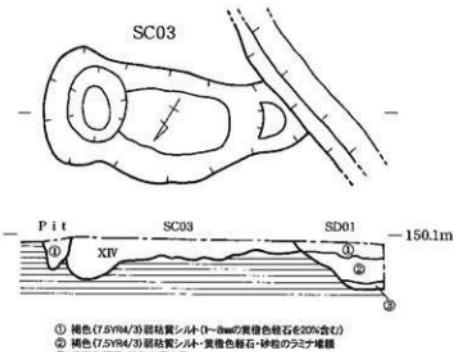
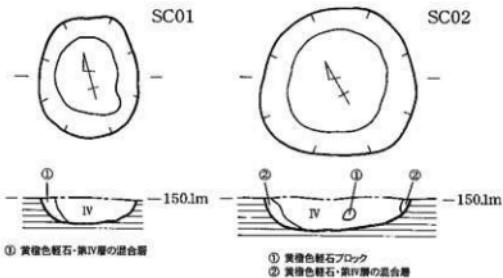
第7図 遺構(S B 01)実測図



第8図 造構(S D01・S F01)実測図



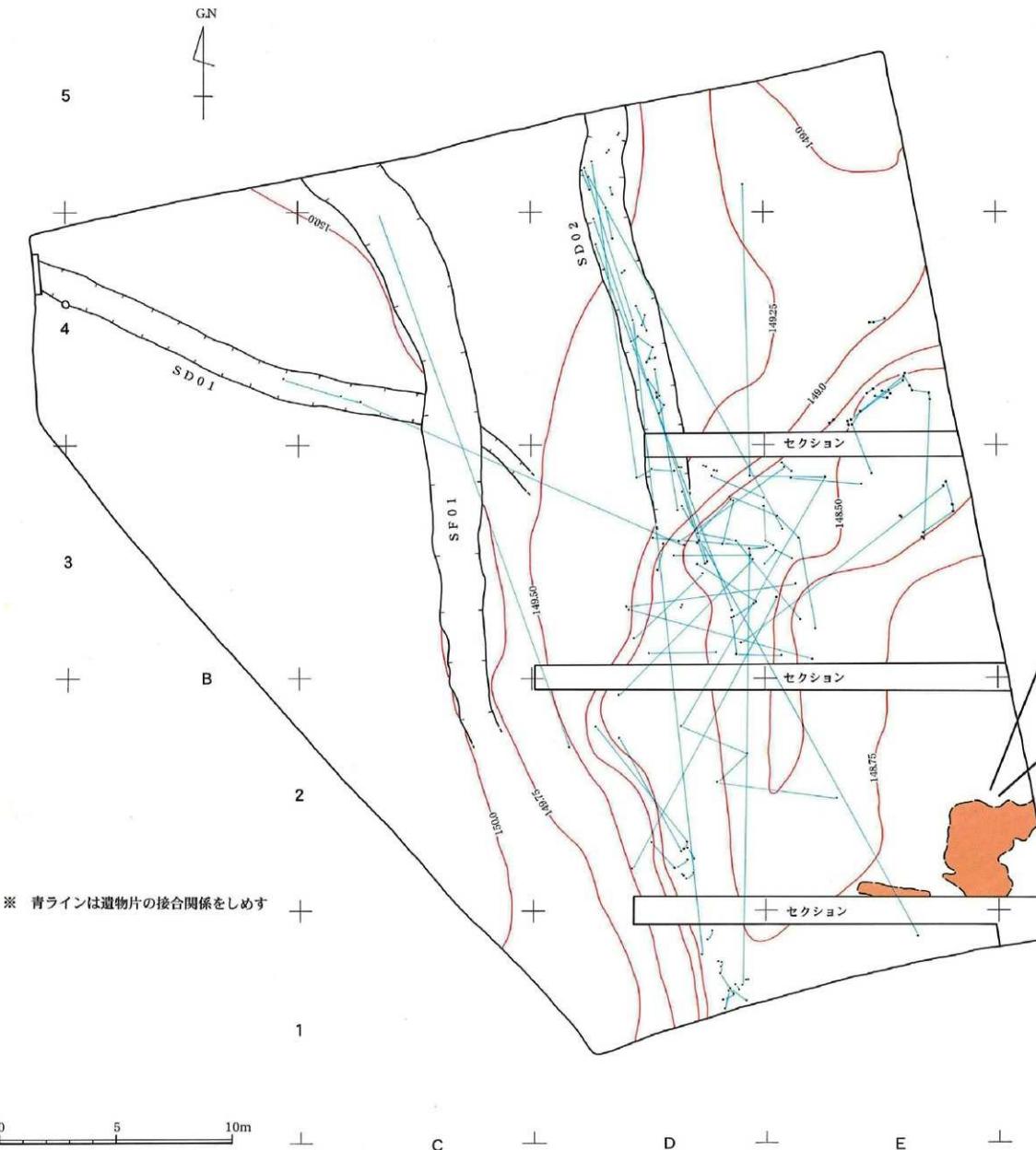
第9図 道構(SD02・03・04・05)実測図



0 1 2m

0 1 2m

第10図 造構(S L01・02)(S C01・02・03)(S E01)実測図



木片群出土状況（全景）



木片群出土状況（近景）

第11図 出土遺物分布状況図 (1/200)

### 3. 遺物所見

出土遺物は各遺構単位および包含層内に分けて、器形・法量復元可能および特徴的な物を可能な限り掲載した。包含層内出土遺物については、異層間での接合関係が多数生じた為、第Ⅶ層～第XⅢ層にわたって出土した遺物を、各層別ではなく、包含層〔第Ⅶ～XⅢ層〕内出土として一括し、各種別および器種ごとに掲載した。尚、各遺物の出土層位については、掲載遺物観察表に記載している。また、表土剥ぎの際に、出土した遺物も参考資料として、表土剥ぎ一括〔第I～V層〕出土と表記し、末尾に掲載した。

土師器の壺・碗の器種分類については、形態からではなく、用途上から、高台が付くものすべてを壺とし、付かないものを碗とした。

実測図の掲載順序については、土師器の壺・碗は基本的に、口径ないし底径の、大→小という順である。また、土師器の甕については、〔体部から口縁部にかけて広がっていくタイプ〕→〔体部から口縁部にかけて、ややストレートに立ち上がるタイプ〕→〔体部がやや丸くふくらむタイプ〕の順で掲載した。(レイアウトの都合上、一部例外あり)

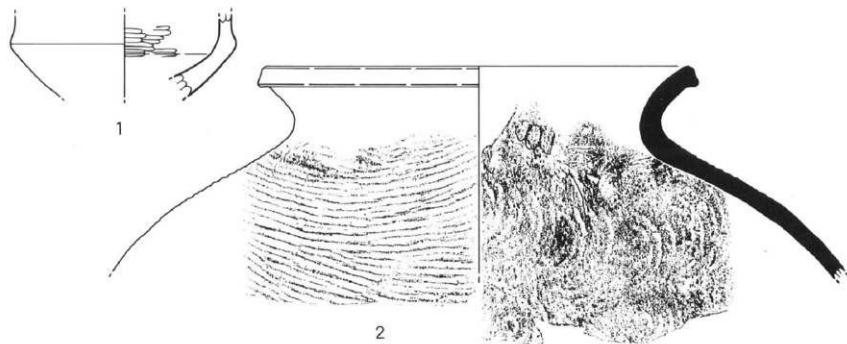
黒色土器は、内面のみ炭素を吸着させた黒色土器A類(内黒)と、内外両面に炭素を吸着させた黒色土器B類(両黒)とでは、製作技法が異なる点から、分けて掲載した。

#### S D 01出土遺物 (第12・13図)

1は縄文時代晩期に属する黒川式土器の浅鉢である。2は須恵器の甕であり、頸部内面に指頭痕をのこす。3～10は土師器の壺であり、いずれも底部切り離し技法はヘラ切りである。3・9は底面に板状圧痕が認められ、4・8は底部からの立ち上がり部をヘラ削りによって仕上げられている。11～16は土師器の高台付碗であり、15は内面に炭素を吸着させた痕跡があり、黒色土器A類(内黒)である可能性があるが、摩滅が著しく不明である。17～22は土師器の甕であり、17・22は外面にススの付着がみられる。23～29は製塙土器である焼塙壺の口縁部および体部であり、内面に布目圧痕をのこす。いずれも小破片である。30は鋳造に用いられる坩堝の口縁部片と思われ、内面全体および口縁端部外面が溶化している。31はファイゴの羽口であり、先端部は淬化している。通風孔部は内径15mm(推定)の直線状である。小型品である事から、製鉄炉ではなく、小規模な鍛冶炉で使用されていたと推測される。32は側面2面に破面をもつ不整橢円形をした楕形鍛冶津で、表面に赤錆を帯びており、軽量である。

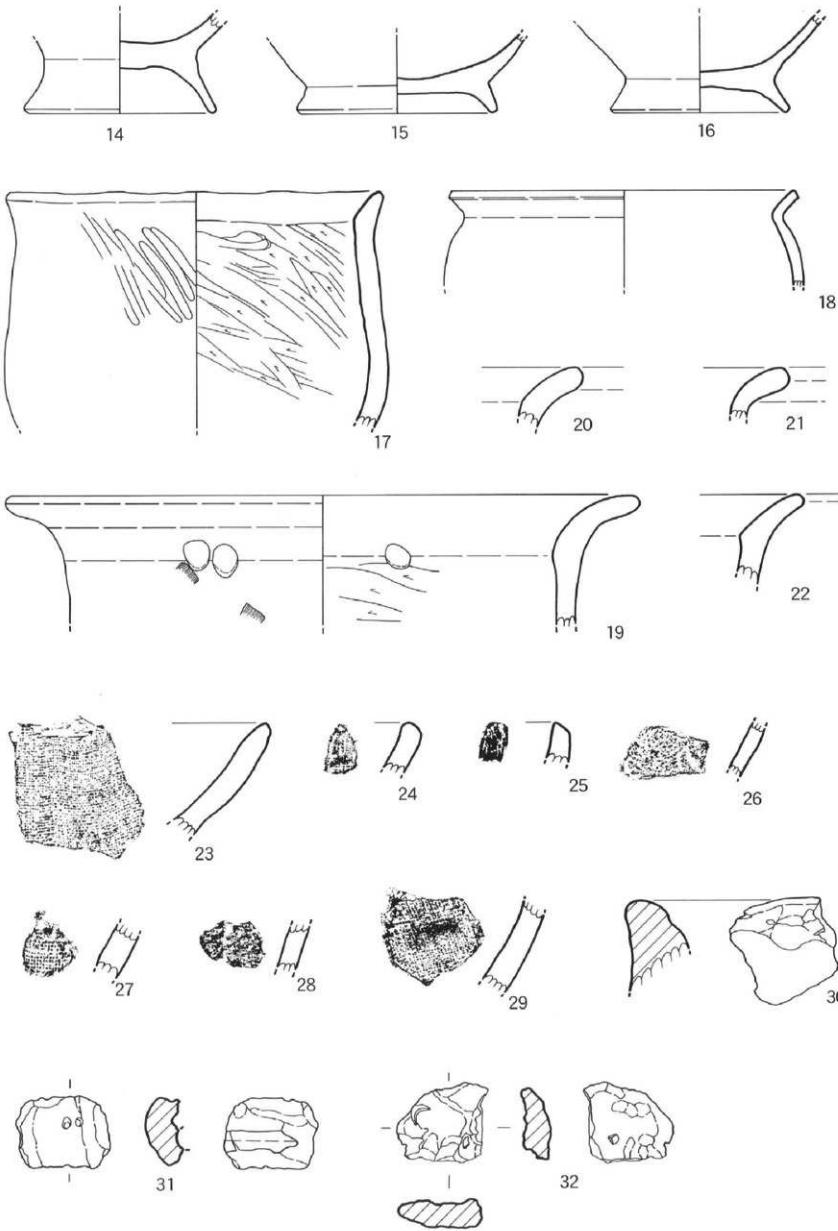
#### S D 0 2出土遺物 (第14～18図)

33～72は土師器の壺であり、底部の切り離し痕跡を確認できる器については、すべてヘラによる切り離しであった。33～36・38・45・48・49については、底部からの立ち上がり部をヘラケズリによって仕上げている。44は外面に部分的なススおよび炭化物の付着、内面には部分的な炭化物の付着が認められる。50は体部外面に「十」の線刻が施されている。53・54・64の底部は円盤貼付である。66は底面に板状圧痕をのこす。73～76は土師器の高台付碗であり、74は高台の貼付痕をのこす。77～96は土師器の甕であり、80・88～90・93・94は外面にススの付着が認められる。97は土師器の壺か碗の底部を二次転用した紡錘車である。98・99は黒色土器A類(内黒)であり、99には高台部の接合痕が確認できる。100・101は内面に布目圧痕をのこした、固型塙生産(焼塙)および、運搬目的とした製塙土器の口縁部片と共に小破片である。102は須恵器の長頸瓶の底部片と思われる。器の内外面の片側だけに、黒色の付着

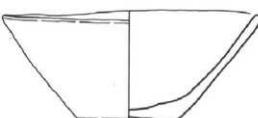
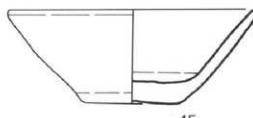
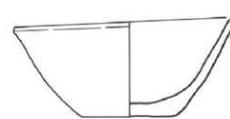
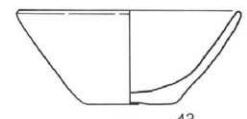
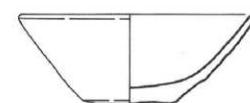
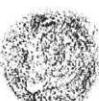
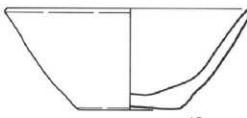
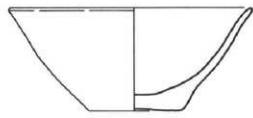
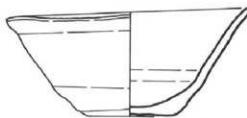
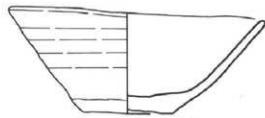
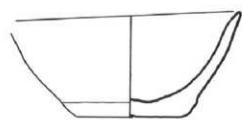
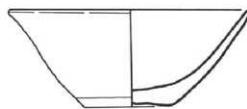
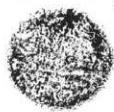
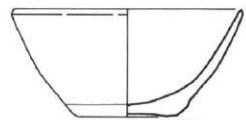


第12図 S D01出土遺物 実測図 (1)

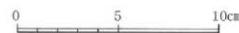
0 5 10cm

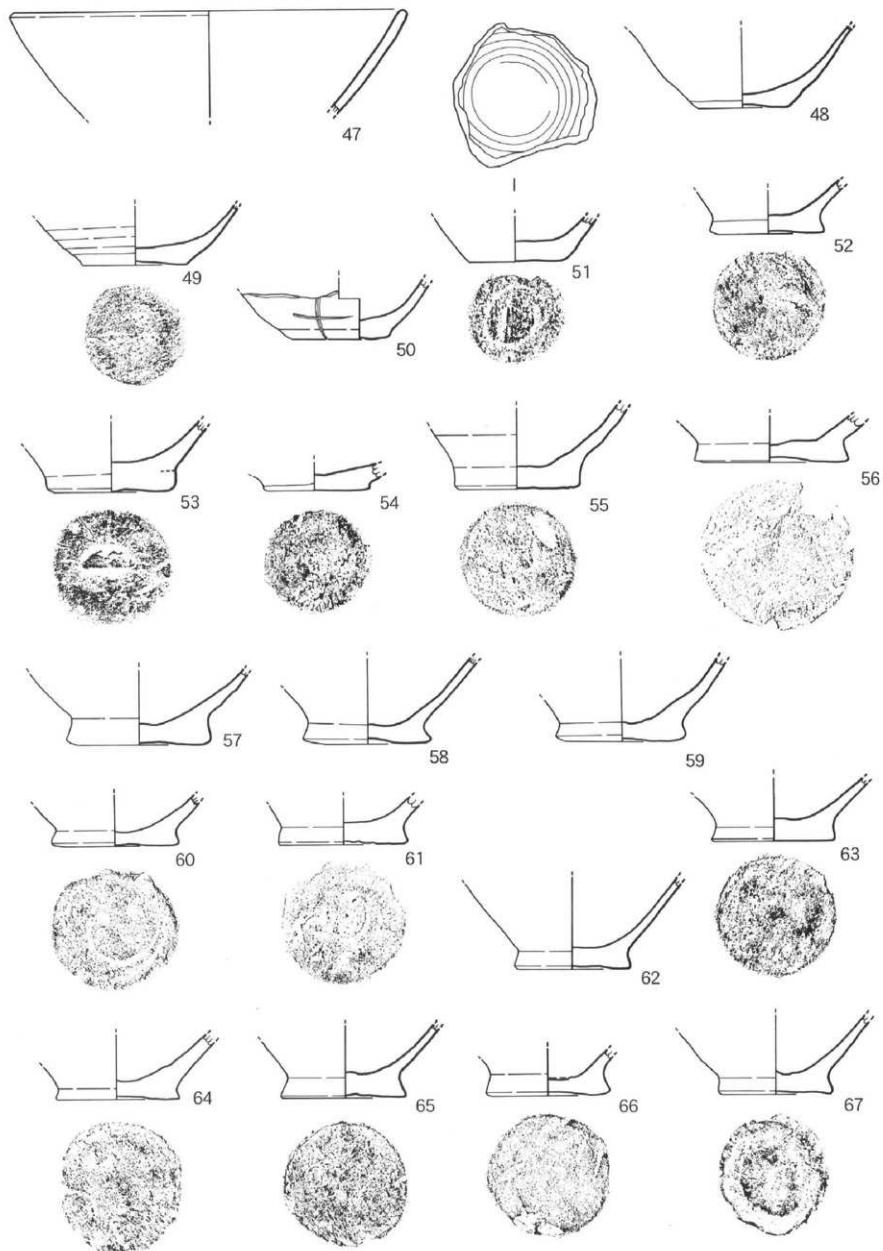


第13図 SD01出土遺物 実測図(2)



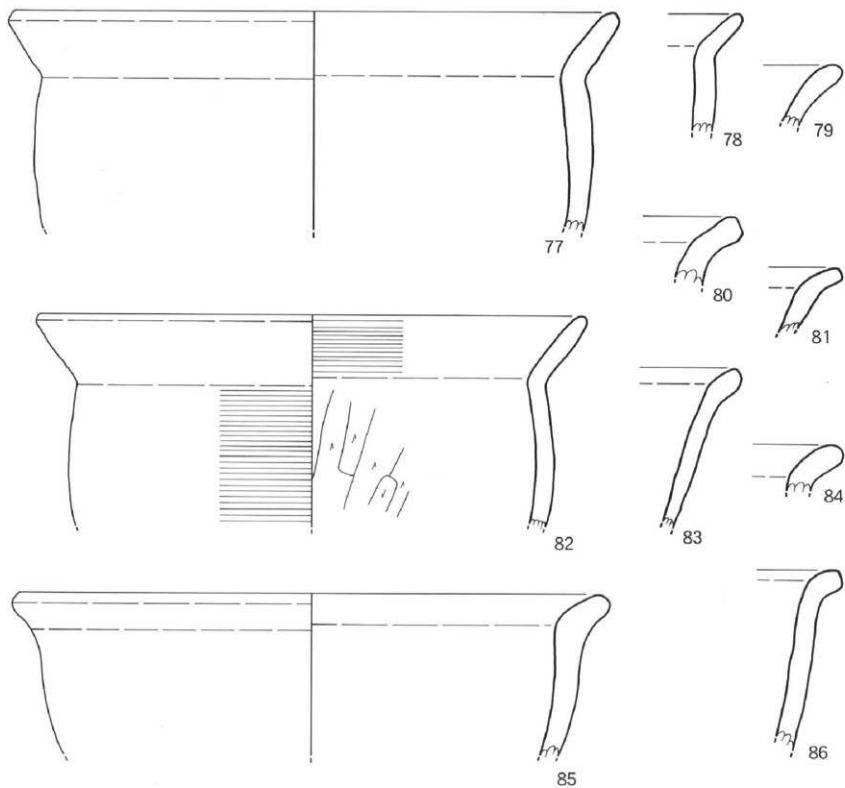
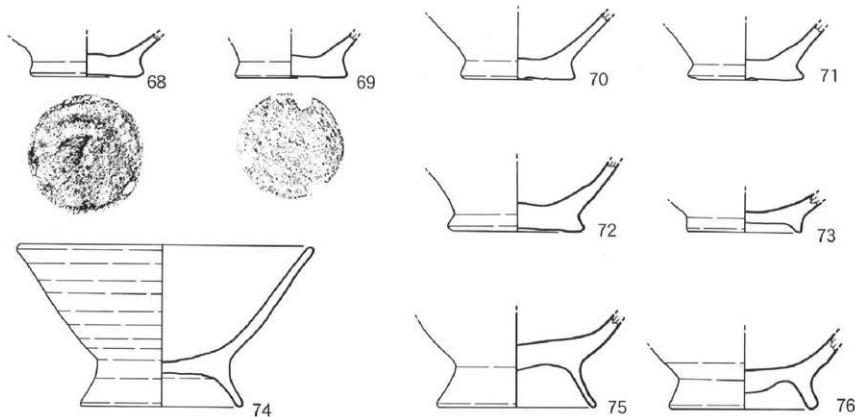
第14図 S D02出土遺物 実測図(1)





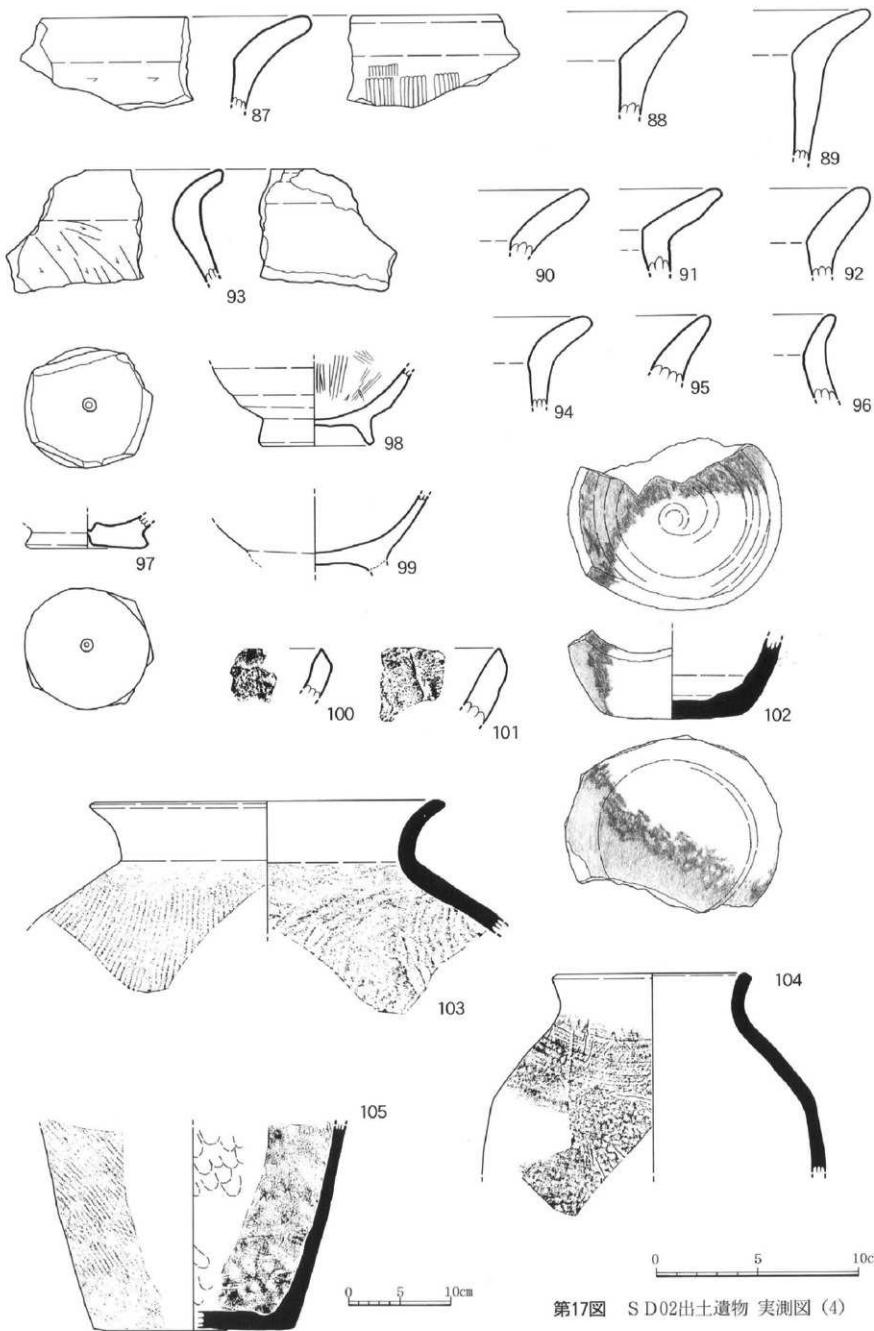
第15図 SD 02出土遺物 実測図 (2)

0 5 10cm



第16図 SD02出土遺物 実測図(3)

0 5 10cm



第17図 S D 02出土遺物 実測図 (4)

物(黒ウルシと思われる)があり、また破損した断面にも付着物がみられる事から、器が破損した後に、ウルシを貯蔵容器から汲み出す器として使用していたものと考える。103は須恵器の甕である。104は須恵器の短頸壺の口縁～胴部片である。105は須恵器の平底の鉢と思われ、内外面に輪積み痕をのこし、内面には指頭痕が認められる。106～108は土師器の坏ないし椀に墨書きが施された墨書き土器であり、106・107は体部外面に、108は口縁部外面に文字の一部らしき墨書きが認められるが、いずれも断片であり判読不能である。109は縄釉陶器の皿である。削り出しの輪高台であり、高台内部および登付部は無釉である。京都産洛西型で9世紀第3四半期と思われる。110～112は越州青磁の碗である。110は釉の発色が悪く、体部外面下位は無釉である。II類(粗製品)である。111は釉の発色が悪く、口縁部はやや外反している。II-2 b類である。112は体部外面下位が無釉であり、釉の発色は悪くかなり風化している。II-2類と思われる。113はフイゴの羽口である。先端部は溥化しており、通風孔部は内径20mm(推定)の直線状である。小型品である事から、鍛冶炉で使用されていた物と思われる。114は平面、不整台形と不整椭円形が二重に重なった椭形鍛冶炉であり、全体に軽石および小礫を含み、表面に赤錆を帯び重量感がある。115は土師器の瓶の把手部分である。116は手捏土器(ミニチュア土器)であり、内外面に指頭痕をのこす。

#### SD03・04・05、SF01出土遺物 (第19図)

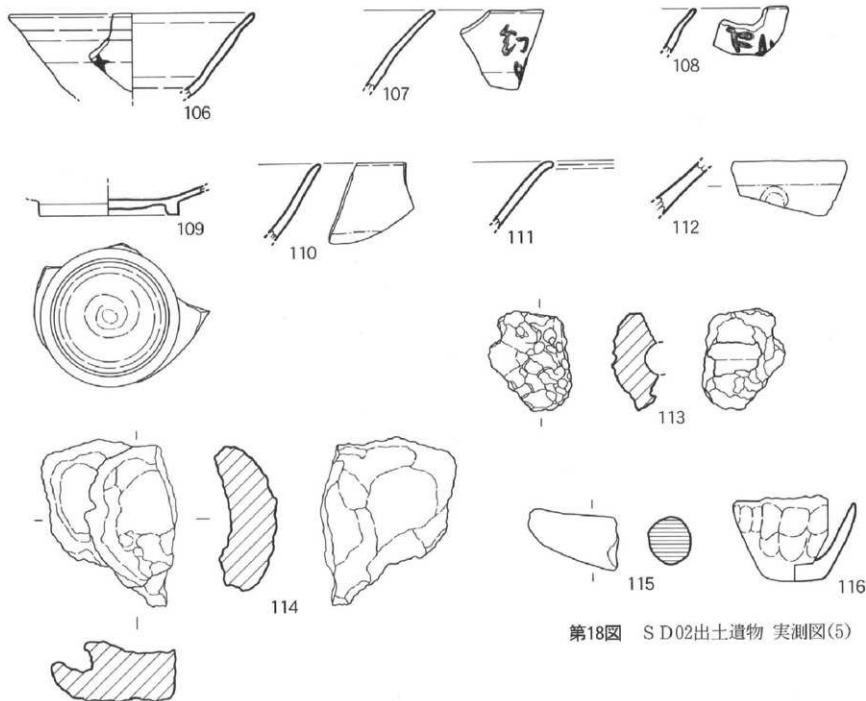
117はSF01から出土した縄文時代後期の市来式土器で波状口縁をもつ深鉢の口縁部片である。118はSD04から出土した縄文時代晩期の精製浅鉢の底部片であり、外面に編布圧痕をのこす。119はSD03から出土した土師器の甕であり、外面にススの付着が認められる。120はSD05から出土した土師器の坏である。底部の切り離し技法はヘラ切りであり、底部立ち上がり部をヘラケズリによって仕上げている。121はSF01から出土した黒色土器A類(内黒)の高台付碗であり、底部をヘラで切り離した後ナデ調整している。122はSF01から出土した須恵器の壺であり、底部切り離し技法はヘラ切りである。

#### 包含層〔第VII～XIII層〕出土 縄文土器 (第20・21図)

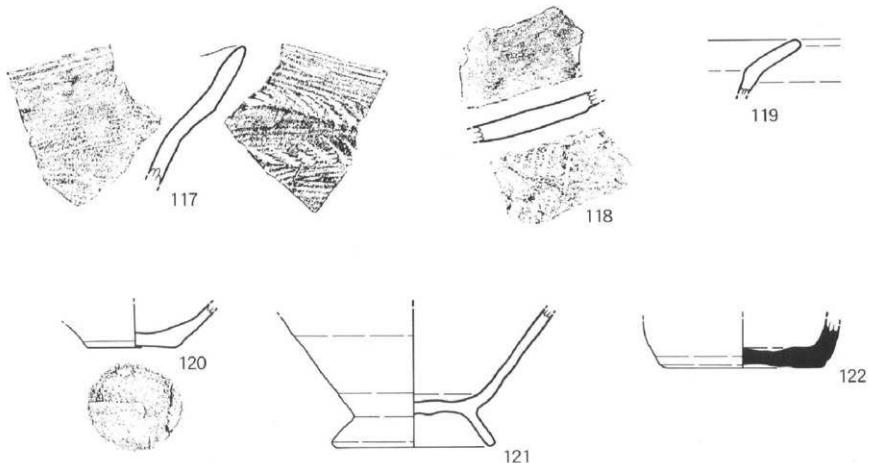
123は縄文時代早期に位置する平柄式の口縁部片であり、口唇部にキザミが、口縁肥厚帯には沈線文が施されている。124は縄文時代後期の市来式土器の口縁部片である。125は孔列文をもつ鉢形土器の口縁部片である。126は口縁部片であり、口唇部に刻目をもち、外面には浅い刻目が施された隆帯をもつ。器種は不明である。127は縄文時代晩期に属する黒川式土器の口縁部片であり、口唇部にヒレ状突起をもち、ミガキによって仕上げられている。128は縄文時代晩期の精製浅鉢であり、外面下部の一部に編布圧痕をのこす。129～134は縄文時代晩期の精製浅鉢の口縁部片であり、外面にはススの付着がみられる。135～141は縄文時代晩期の精製の底部片であり、外面に編布圧痕をのこし、139は内面に炭化物の付着が認められる。

#### 包含層〔第VII～XIII層〕出土 土師器〈坏〉 (第22～26図)

142～215は土師器の坏であり、底部の切り離し痕を確認できる器については、すべてヘラ切りによるものである。142は底部切り離し後、ヘラナデによって仕上げられている。143は口縁部内面にヘラ痕跡をのこす。144・145・147は底部からの立ち上がり部をヘラケズリによって仕上げている。148は底部からの立ち上がり部をヘラケズリによって仕上げてお

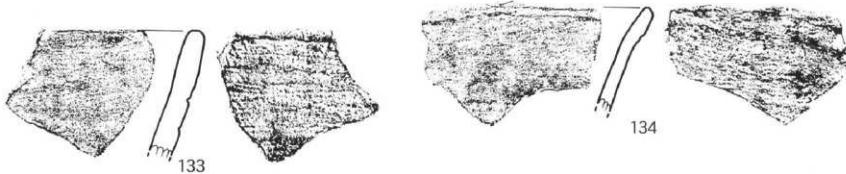
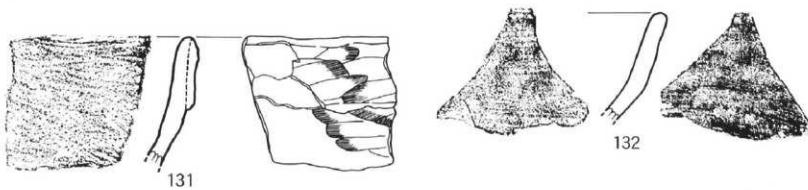
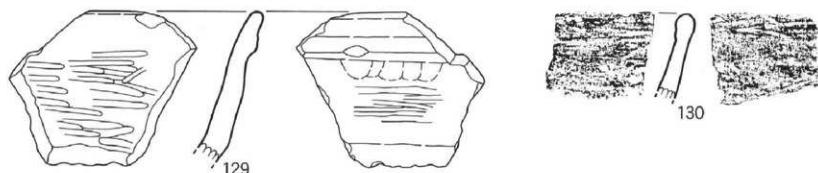
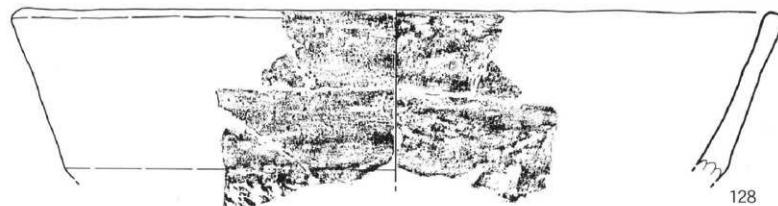
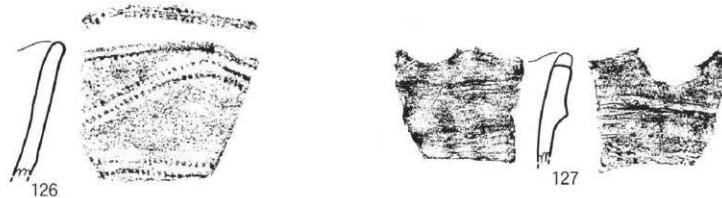


第18図 SD 02出土遺物 実測図(5)



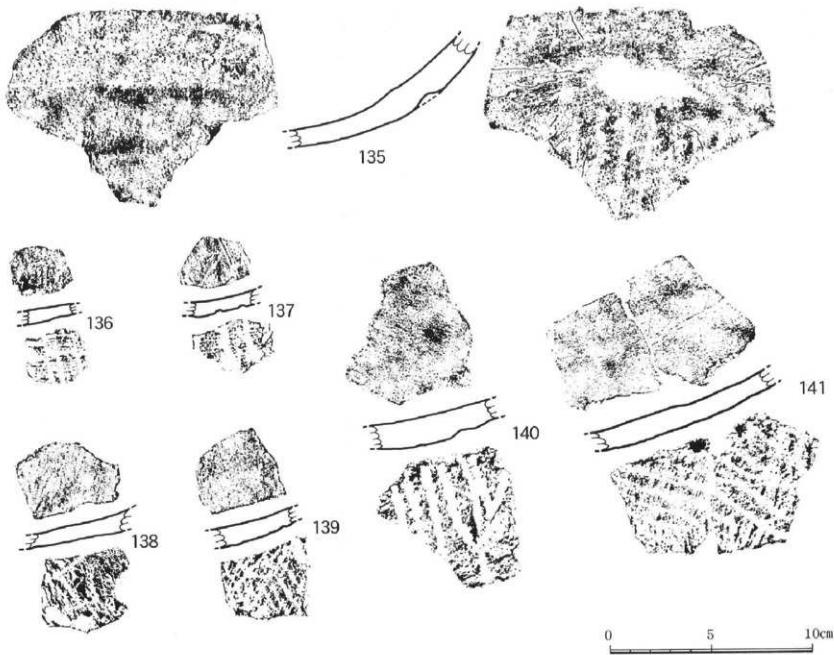
第19図 SD 03・04・05、SF 01出土遺物 実測図

0 5 10cm



第20図 包含層(第VII～XIII層)出土 繩文土器 実測図(1)

0 5 10cm

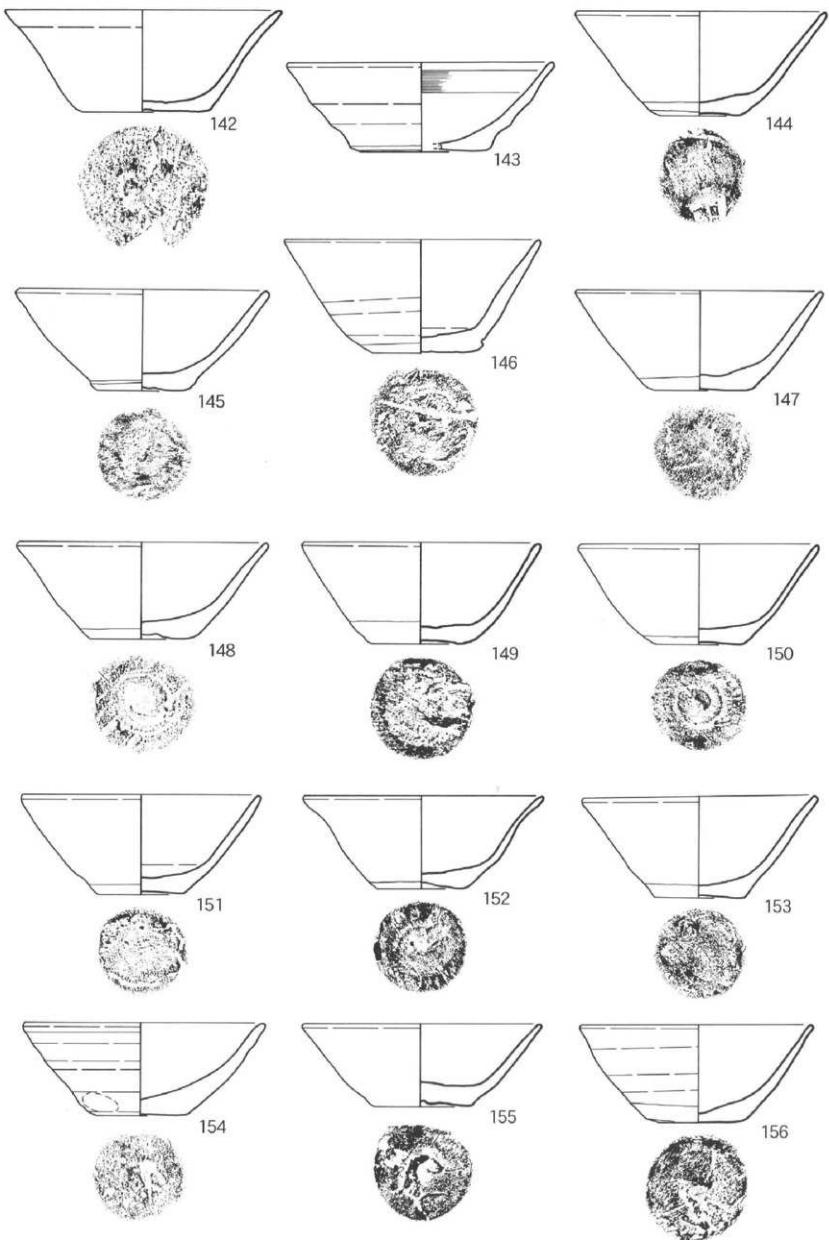


第21図 包含層(第VII～XIII層)出土 繩文土器 実測図(2)

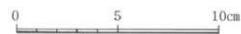
り、底部からの立ち上がり部をヘラケズリで仕上げている。152・153は底部からの立ち上がり部をヘラケズリによって仕上げており、153は外面の一部にススの付着がみられる。154は底部外面に指頭痕が認められる。156・157は底部からの立ち上がり部をヘラケズリによって仕上げている。158は底部切り離し後、ヘラナデによって仕上げており、底部立ち上がり一部をヘラケズリで仕上げている。159は底部立ち上がり部をヘラケズリによって仕上げている。160は底部を切り離した後、ヘラナデによって仕上げており、底部からの立ち上がり部をヘラケズリによって仕上げている。161・164・167は底部からの立ち上がり部をヘラケズリによって仕上げている。169は底部外面にススの付着がみられる。170～174・176～179・182～185・187は底部立ち上がり部をヘラケズリによって仕上げている。188・191は底面に板状圧痕をのこす。193・195・196は底部が円盤高台状であり、195・196は接合痕が確認できる。197・199は内外面にススの付着が認められる。210は底部が円盤高台状であり、接合痕が確認できる。213は底部外面の一部にススの付着が認められる。215は底部内面に指頭痕をのこす。

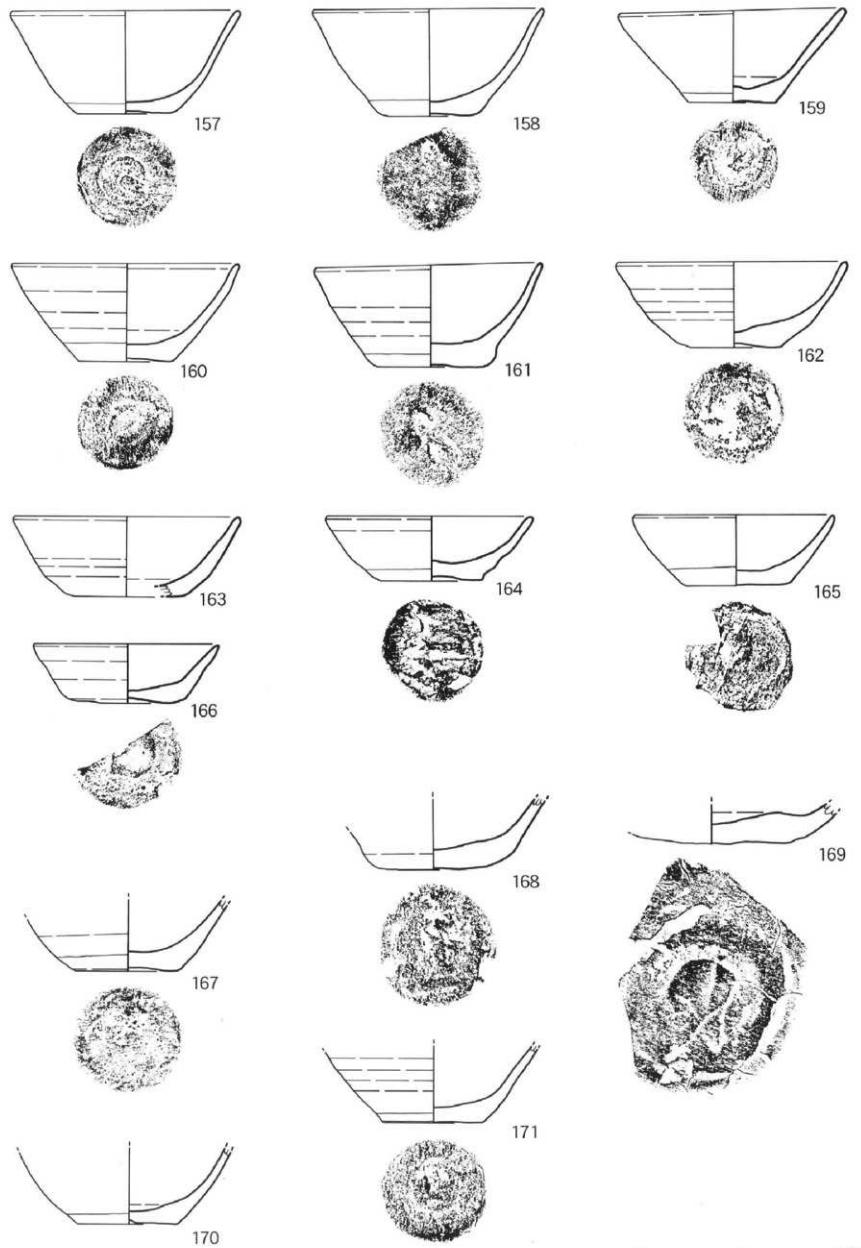
#### 包含層〔第VII～XIII層〕出土 土師器〈壺・椀〉(第27図)

216～229は土師器の壺か椀の口縁～体部片である。217は内面に炭化物の付着、外面にはススの付着がみられる。218は口縁部が白磁椀にみられる、やや扁平の玉線状をなしており、器形も白磁椀I・II類に類似している。220は外面の一部にススの付着がみられる。228は内面に炭化物の付着、外面にはススの付着がみられる。



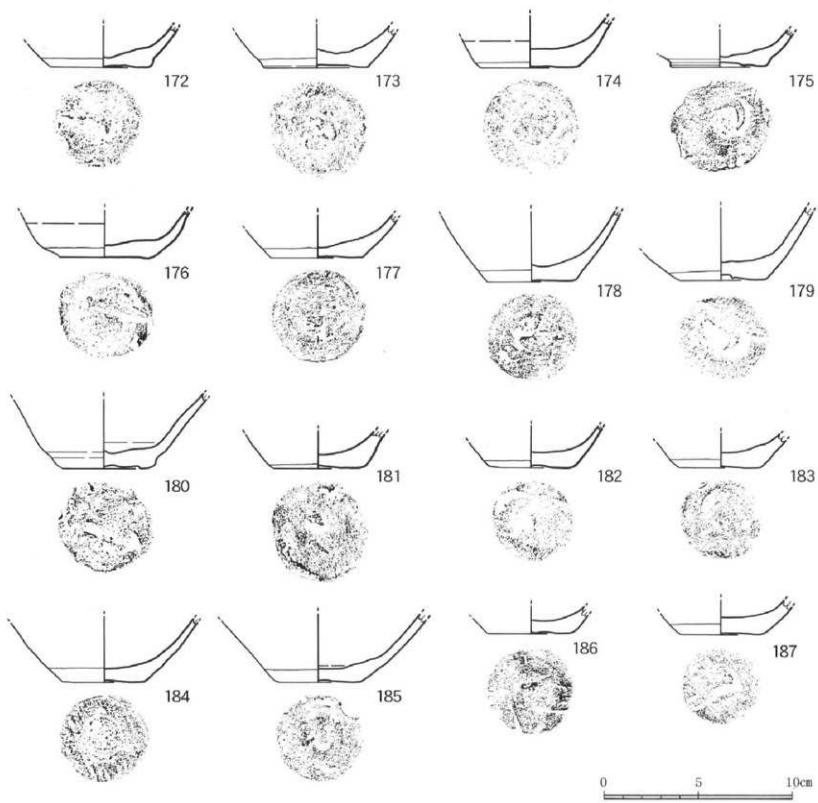
第22図 包含層〔第VII～XⅢ層〕出土 土師器〈环〉実測図 (1)





第23図 包含層(第VII～XIII層)出土 土師器〈環〉実測図(2)

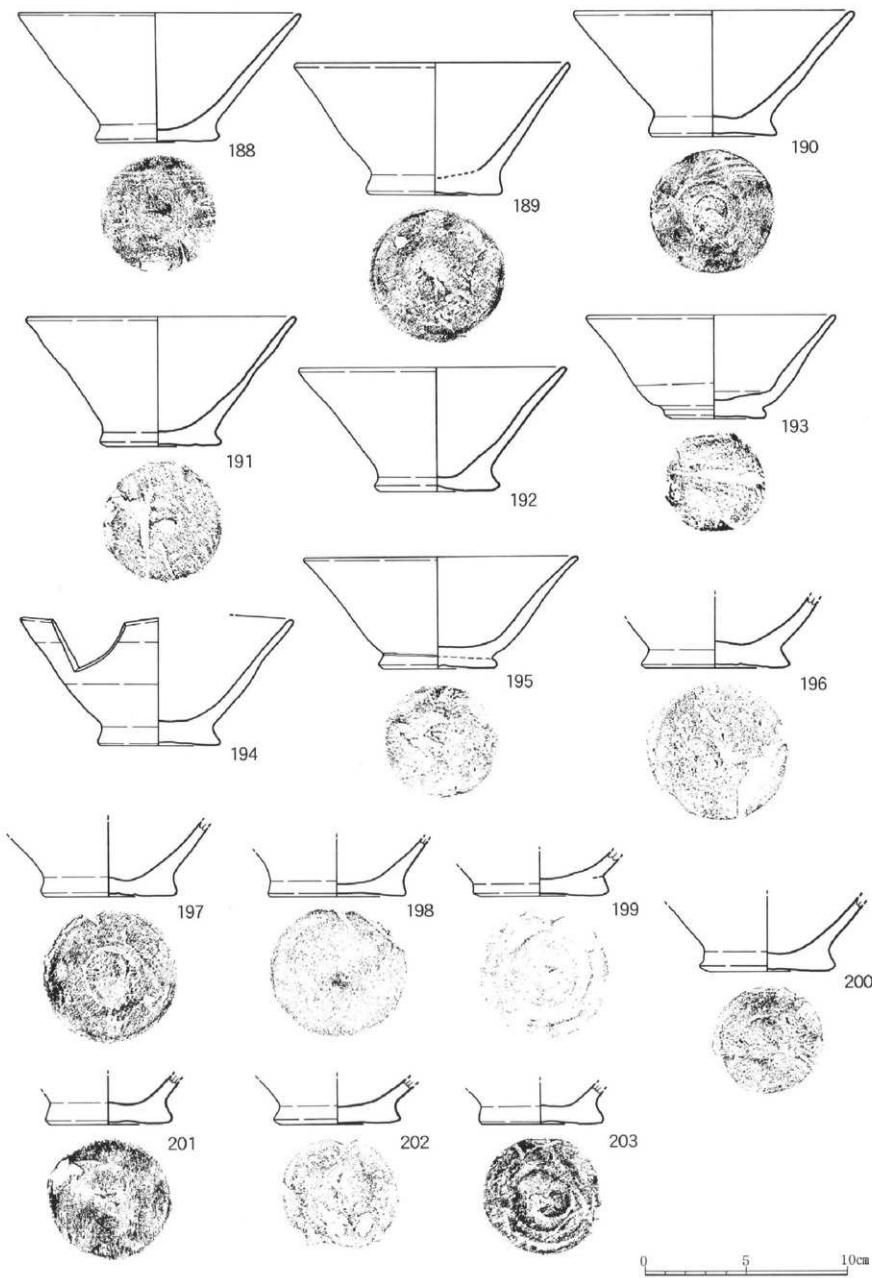
0 5 10cm



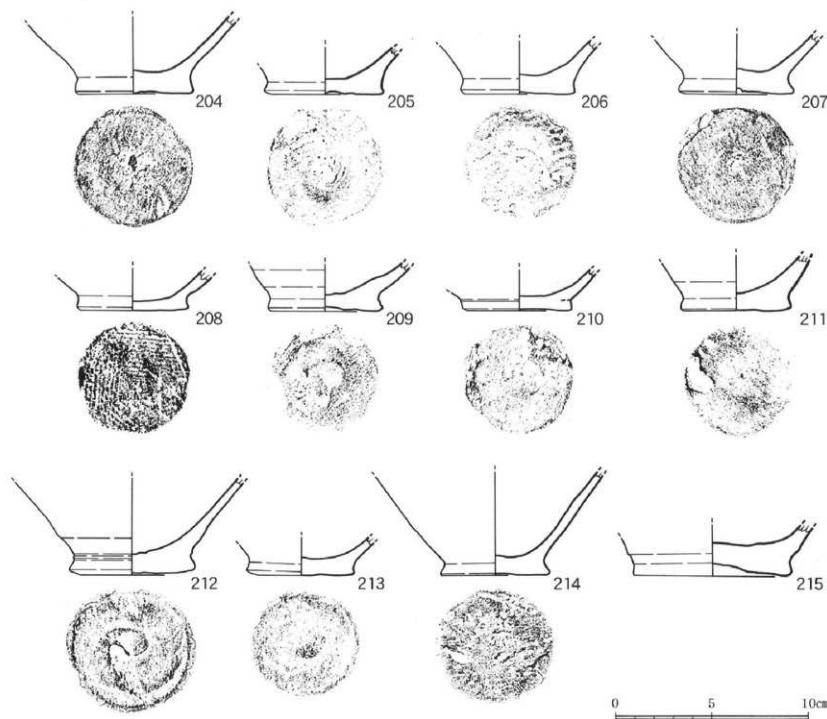
第24図 包含層(第VII～X III層)出土 土師器〈壺〉実測図(3)

#### 包含層〔第VII～X III層〕出土 土師器〈高台付椀〉(第28～29図)

230～246は土師器の高台付椀であり、底部の切り離し痕跡を確認できる器については、すべてヘラによる切り離しだある。230は底部を切り離した後、ナデ調整しており、高台内部にススの付着が認められる。232～237は底部を切り離した後、ナデ調整しており、233・237は高台の接合痕を確認できる。234は玉縁状に近い口縁を有している。239は高台の接合痕が認められる。240は高台部内面にススの付着がある。241～243は底部を切り離した後、ナデ調整しており、241は高台の接合痕を確認できる。243は高台部内面に沈線を巡らせており、体部外面上にはススの付着がみられ、内面全体には炭化物の付着がみられる。244は底面に螺旋状の調整痕をのこす。



第25図 包含層(第VII～XIII層)出土 土師器(坏) 実測図(4)



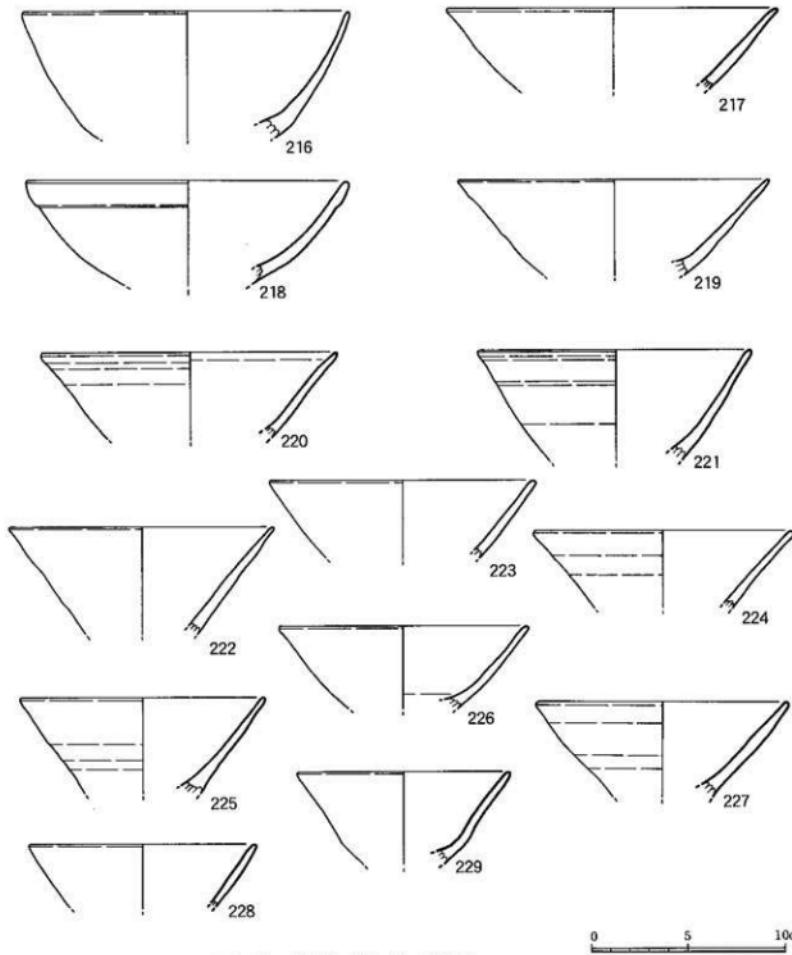
第26図 包含層〔第VII～XIII層〕出土 土師器〈皿〉実測図(5)

#### 包含層〔第VII～XIII層〕出土 土師器〈皿〉(第30図)

247～253は土師器の皿であり、底部切り離し技法はすべてヘラ切りである。248は底部内面に工具痕をのこす。252は高台付皿であり、底部を切り離した後、ナデ調整している。

#### 包含層〔第VII～XIII層〕出土 土師器〈壺〉(第31～35図)

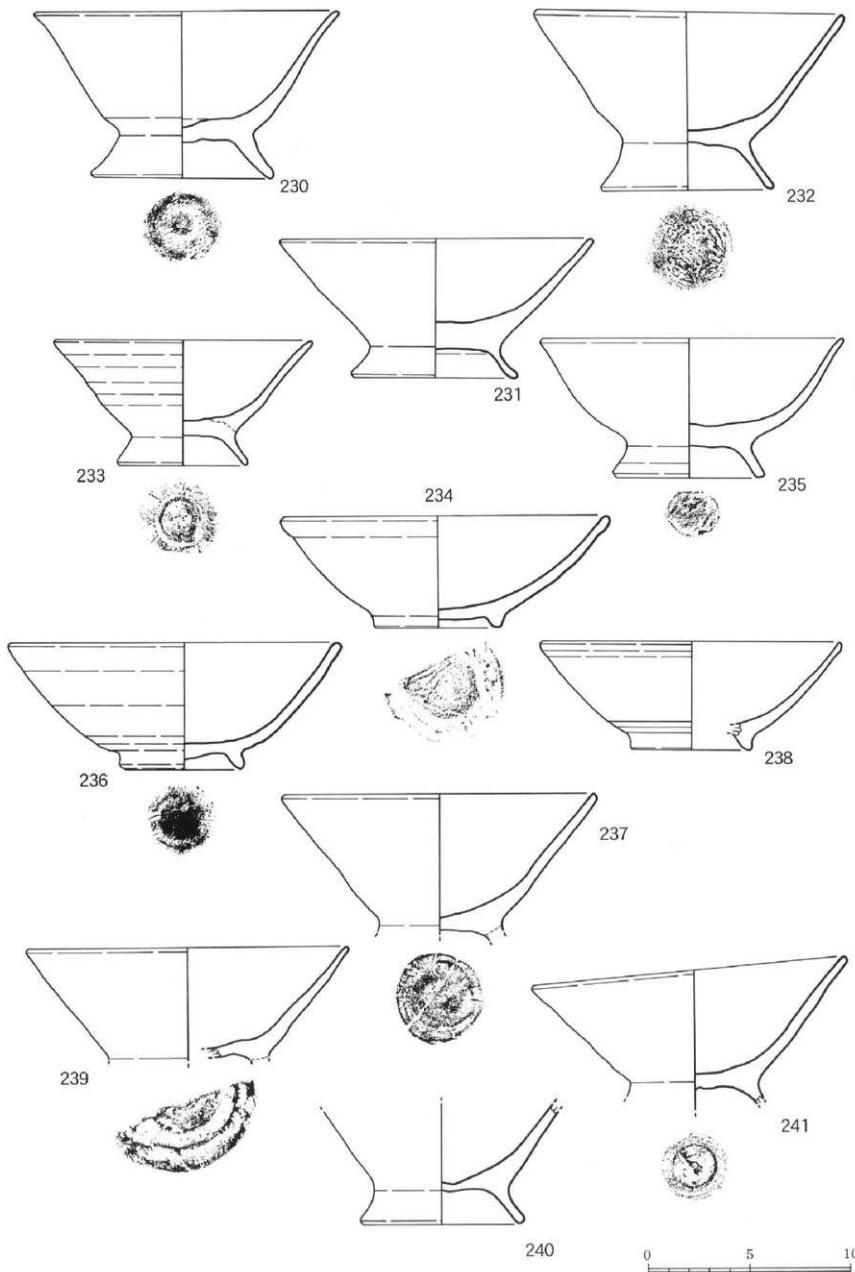
254～303は土師器の壺であり、254・281は口縁～胴部片、255～280・282～302は口縁部片、303は胴～底部片である。257・260・262・263・269・271・283・288・291は外面に、264・267・278・は内外面にススの付着がみられ、289・301は内面に炭化物の付着が認められる。297は外面に指頭痕をのこす。303の底部外面は長期間、熱を受けたと思われ、黒色に変化しており、ススの付着や炭化物の付着がみられる上記の14点と共に煮炊具として使用されたことが窺える。



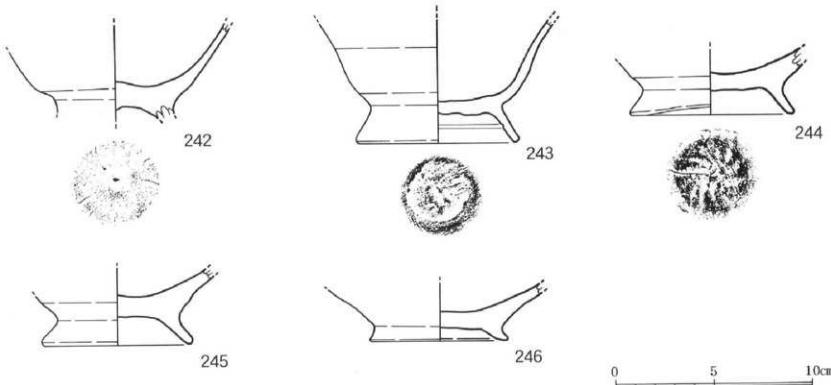
第27図 包含層〔第VII～XIII層〕出土 土師器〈壺・椀〉実測図

包含層〔第VII～XIII層〕出土 土師器〈鍋・他〉（第35図）

304は上鍋の把手部分であり、形態は断面長方形の瘤状である。305は土師質で壺の底部片と思われ、内面に輪積痕をのこす。底部外面および底面にススの付着がみられ、特に底面のスス付着が著しく、破損面にもススが付着している事から、破損後に二次転用された物であろう。



第28図 包含層〔第VII～XIII層〕出土 土師器〈高台付碗〉実測図(1)



第29図 包含層〔第VII～XIII層〕出土 土師器〈高台付椀〉実測図(2)

#### 包含層〔第VII～XIII層〕出土 黒色土器A類 (第36図)

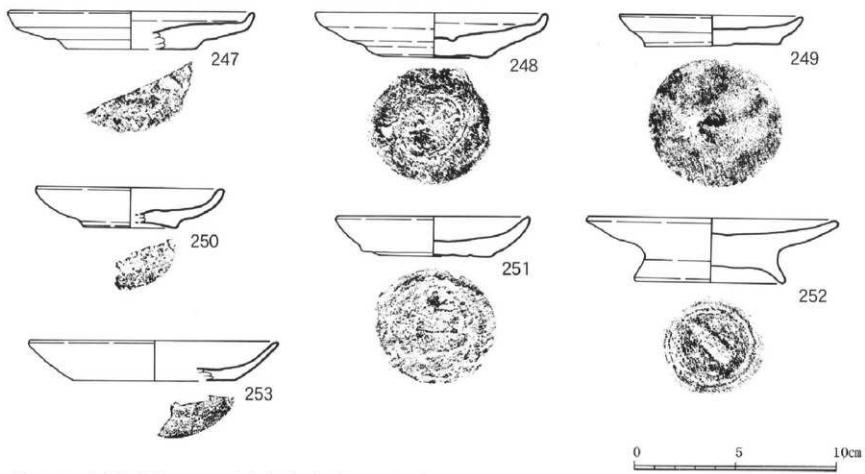
306～317は器の内面のみ炭素を吸着させた黒色土器A類(内黒)である。307・309～317は底部をヘラで切り離した後、ナデ調整をしており、307・309・316は高台の接合痕が確認できる。310は外面にススの付着がみられる。

#### 包含層〔第VII～XIII層〕出土 黒色土器B類 (第37図)

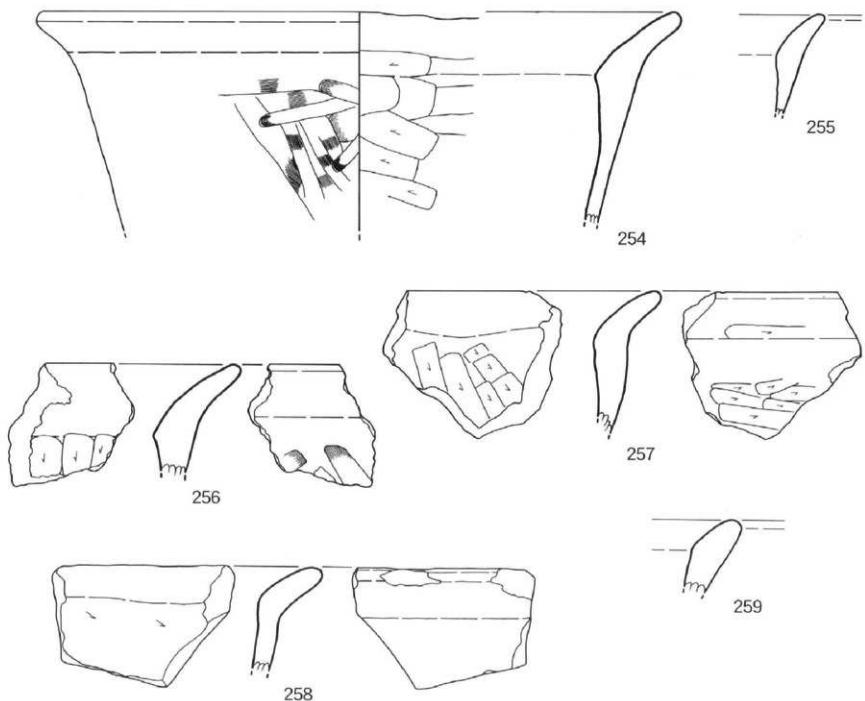
318～323は器の内外面に炭素を吸着させた黒色土器(両黒)である。318・319・322・323は底部ヘラで切り離した後、ナデ調整をしており、322は底部外面に指頭痕をのこす。

#### 包含層〔第VII～XIII層〕出土 土師器〈墨書き〉 (第38図)

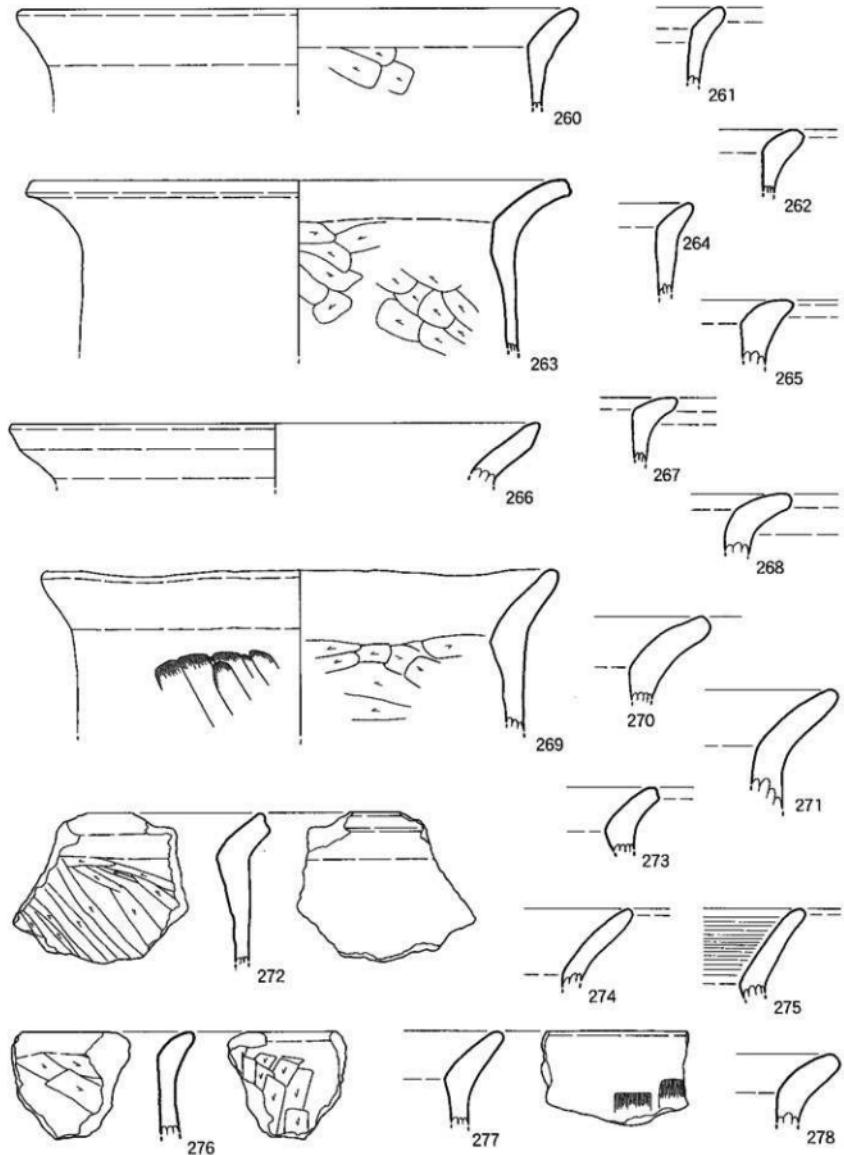
324～340は土師器の坏ないし椀に墨書きが施された、墨書き土器である。324は坏であり、底部切り離し技法はヘラ切りである。体部外面に墨書きが認められるが、文字の一部しか残っておらず、判読は不能である。325は坏か椀であり、体部外面に「十」と読める墨書きと記号らしき線刻が施されている。326は黒色土器A類(内黒)の高台付椀であり、口縁部外面に倒位した墨書きが施されている。一文字の様に見えるが、「日」と「大」が合わさったものと考える。327・328は坏か椀であり、口縁部に「財」の一部と思われる墨書きが施されており、327は口唇部にススの付着がみられる。329は坏か椀であり、口縁部外面に文字の一部と思われる墨書きが認められる。330は坏か椀であり、口縁部外面に「上」と読める墨書きと、文字か記号の一部と思われる墨書きが認められる。331・332は坏か椀であり、331は口縁部外面に、332は体部外面に、「十」と読める墨書きが認められるが、部分的であり、他の文字の一部である可能性もある。333は黒色土器A類(内黒)の坏か椀であり、体部外面に「采□」の墨書きが認められる。文字の一部が欠落しており判読不能である。334～336は坏か椀であり、体部外面に文字の一部と思われる墨書きが認められる。337は黒色土器A類(内黒)の坏か椀であり、体部外面に文字の一部と思われる墨書きが認められる。338は坏と思われ、外面に、平板名の「や」と読める墨書きが施されている。339は坏と思われ、外面に、文字の一部と思われる墨書きが認められる。340は坏であり、体部外面に墨書きが認められるが、文字の一部が欠落しており、判読不能である。



第30図 包含層(第VII～XIII層)出土 土師器〈皿〉実測図

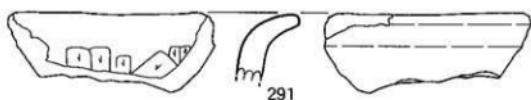
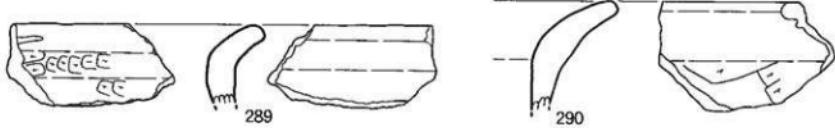
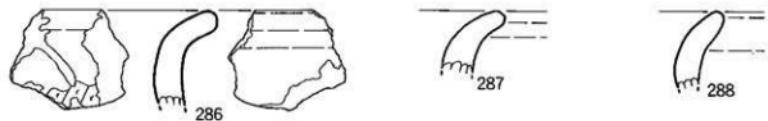
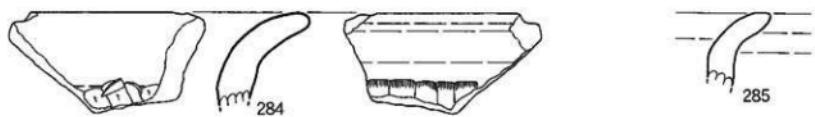
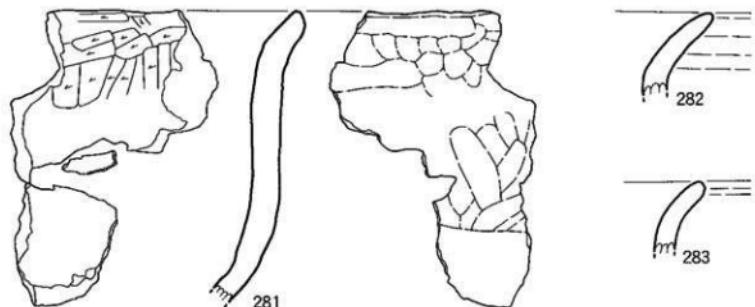


第31図 包含層(第VII～XIII層)出土 土師器〈甕〉実測図(1)



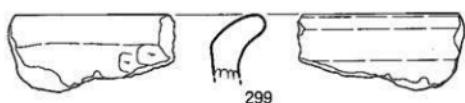
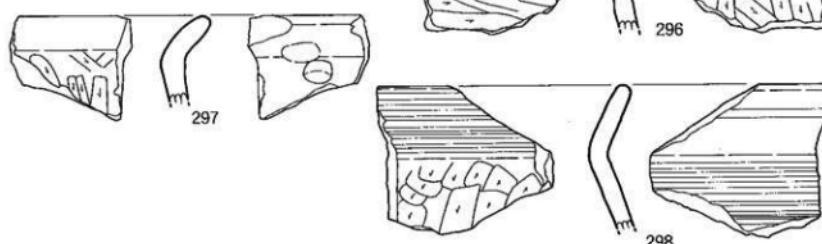
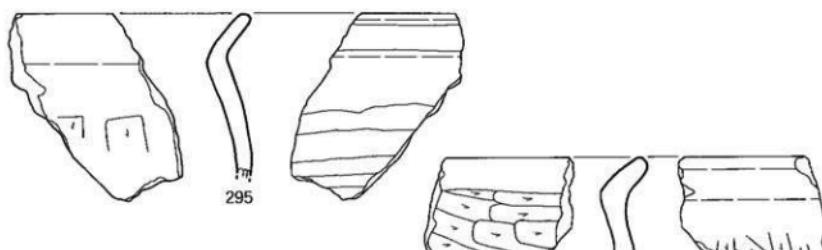
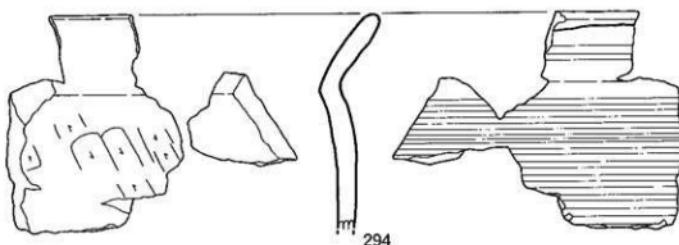
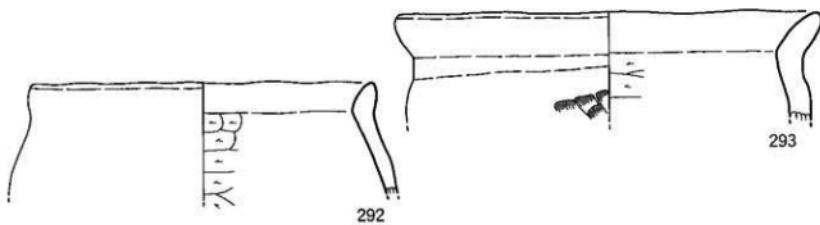
第32図 包含層(第VII~XⅢ層)出土 土師器〈甕〉実測図(2)

0 5 10cm



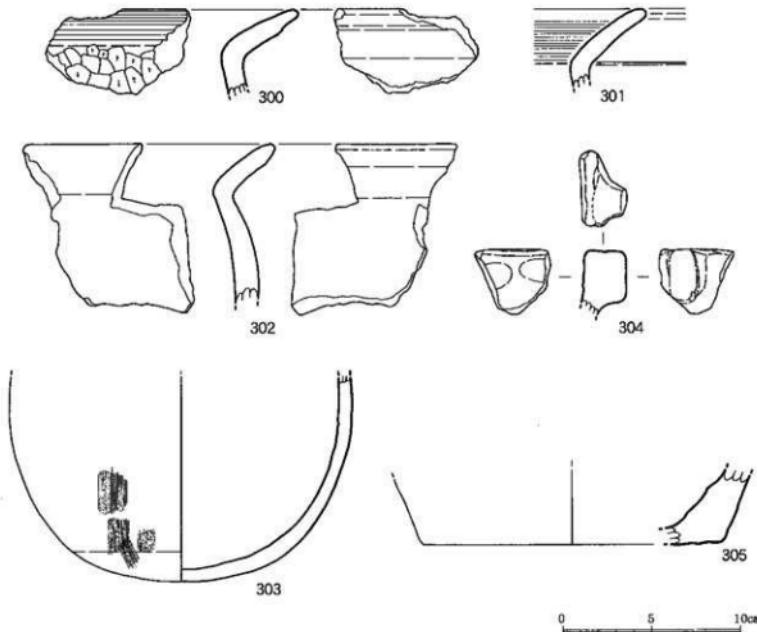
第33図 包含層(第VII～XⅢ層)出土 土師器(甕)実測図(3)





0 5 10cm

第34図 包含層(第VII~XⅢ層)出土 土師器(甕)実測図(4)



第35図 包含層〔第VII～X III層〕出土 土師器〈壺・鍋・他〉実測図

包含層〔第VII～X III層〕出土 土師器〈刻書〉（第39図）

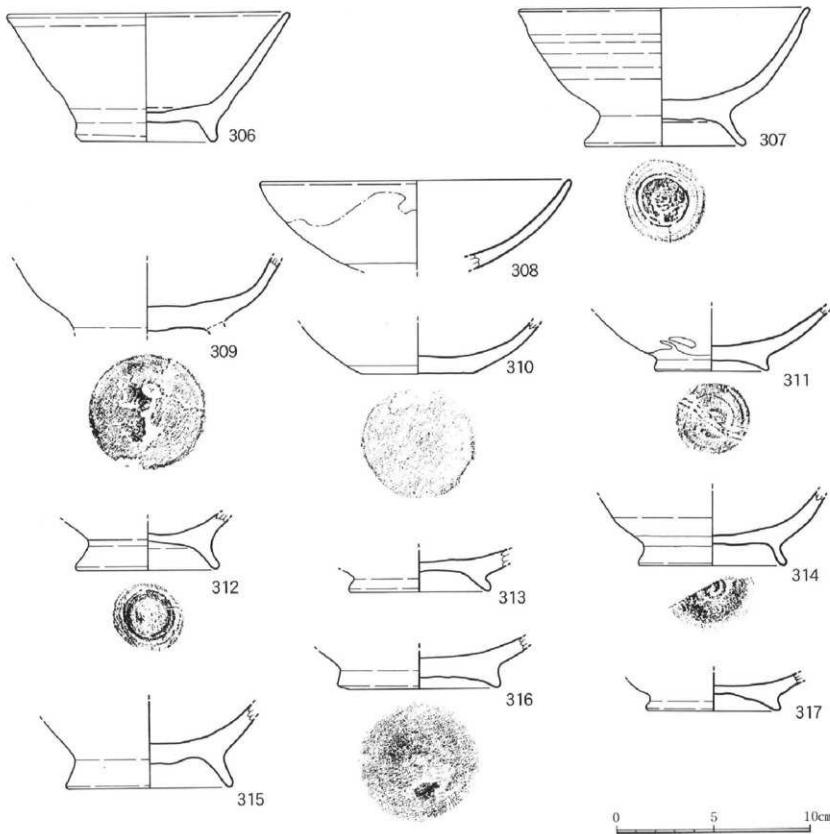
341～348は土師器の环・椀・皿に線刻ないしへラ書きが施された刻書土器である。341は环か椀であり、口縁～体部にかけての外面に、数条の線刻が認められる。342は高台付椀であり、口縁～体部にかけての外面に「V」状の線刻が2条、施されている。343は环か椀であり、口縁部外面に記号らしき線刻の一部が認められる。344は环か椀であり、体部外面に数条の線刻が認められる。345は环か椀であり、体部外面に「×」の一部と思われる線刻が施されている。346は环か椀であり、体部外面に「田」状の線刻が施されているが、文字を意識したものか、記号なのかは不明である。347は环か皿であり、底部外面に「□」と「×」を組み合わせた様な線刻が施されている。348は高台付椀と思われ、底部外面に「卜」のヘラ書きが施されている。

包含層〔第VII～X III層〕出土 土師器〈紡錘車〉（第40図）

349～354はいずれも、土師器の环および高台付椀の底部片を紡錘車に二次転用したものである。350は内面に炭化物の付着がみられる。

包含層〔第VII～X III層〕出土 土師器〈焼塩壺〉（第41・42図）

355～391は固体塩生産(焼塩)および運搬を目的とした製塩土器である。355～368は口縁部片、369～

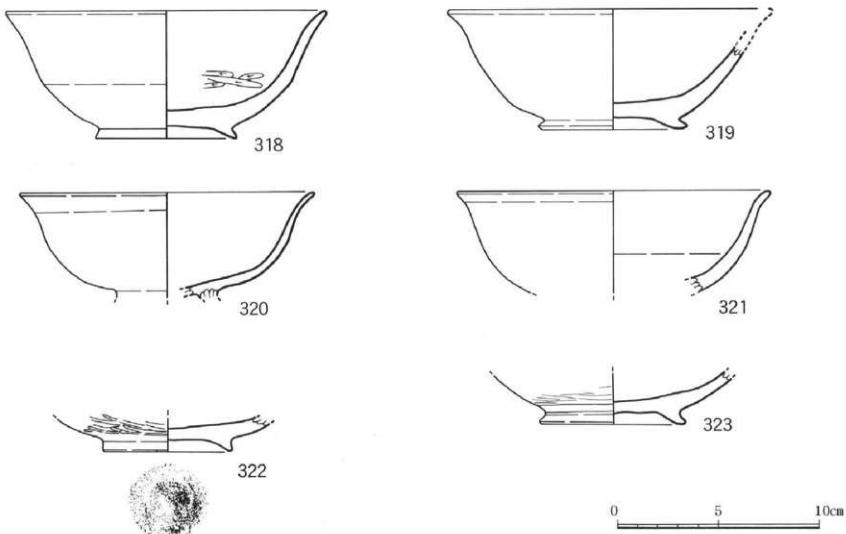


第36図 包含層〔第VII～XIII層〕出土 黒色土器A類 実測図

391は体部片であり、口縁部片については口唇部がシャープなもの、やや丸みを帯びたものがある。土師質で器形は、逆円錐形を呈していたと思われ、内面には布目压痕を留めていることから、型に布をあてがい、粘土を圧着させて成型した、型作りによるものと考える。いずれも小破片の為、詳細は不明であるがⅢ a類ないしⅢ d類に属するものと考える。

#### 包含層〔第VII～XIII層〕出土 須恵器（第43図）

392は壺であり、体部外面に「V」状の線刻が施されている。底部切り離し技法はヘラ切りであり、器高が低く、たちあがりは短く内傾している。陶邑Ⅱ形式5段階(TK209)に相当し、7世紀初頃と思われる。393は壺であり、底部切り離し技法はヘラ切りである。小径で、器高が低く、たちあがりは短く、内傾している。



第37図 包含層〔第VII～XIII層〕出土 黒色土器B類 実測図

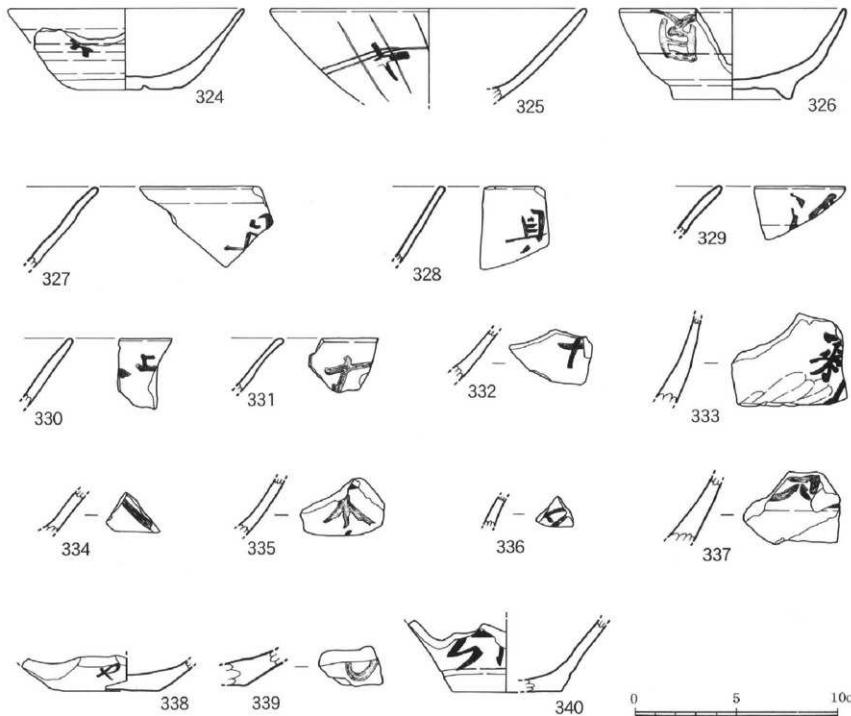
陶邑II式6段階(TK217)に相当し、7世紀前半と思われる。394は短頸壺の口縁部片であり、口縁部は外反し、口唇部にくぼみをもつ。395は長頸瓶の口縁部片であり、口縁部はやや外反しながら、直立ぎみに立ち上がり、口唇部は丸みを帯びる。396は胴部に丸みをもつ長頸瓶と思われ、底部の切り離し技法はヘラ切りである。397は小型の瓶と思われ、底部をヘラで切り離した後、ナデ調整されている。底部内面には渦巻状のナデ調整痕を明瞭にこしている。器の内外面が黒色化しており、胎土も焼きが甘く、焼成不良品と考える。398は甕の口縁～頸部片である。口縁部は大きく外反し、口唇部内側がわずかにくぼむ。399は平底の鉢の胴～底部片である。400は大型の甕になると思われる。

#### 包含層〔第VII～XIII層〕出土 東播系須恵器（第44図）

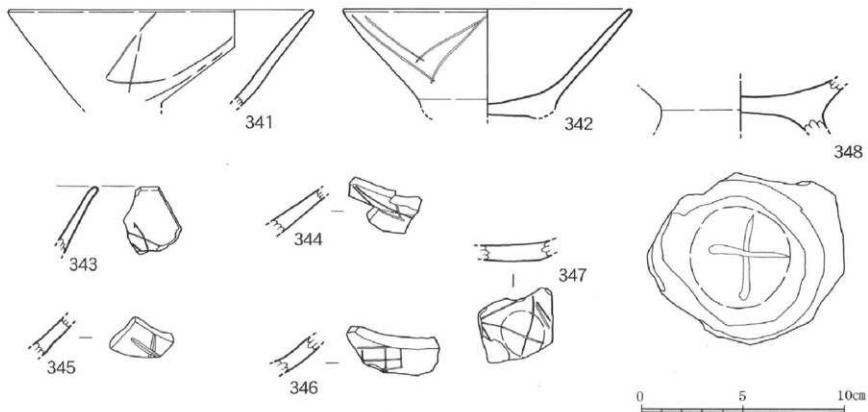
401～404は東播系須恵器の片口鉢である。401は体部が直線的に立ち上がり、口縁端部外面は、くの字状に張り出し、内面には弱いくぼみがある。神出・魚住窯産で13世紀初頃と思われる。402は体部がやや丸みを帯びながら直線的に立ち上がる。口縁端部外面のくの字状の張り出しが、やや垂れ下がり鈍角である。また、口縁端部外面には、黒緑色の自然釉がかかっており、これは焼成の際、重ね焼きによって生じたものである。神出・魚住窯産で13世紀前半と思われる。403は口縁端部外面が、くの字状に張り出し、口縁部はやや内傾している。また、口縁端部外面には黒色の自然釉がかかる。神出・魚住窯産で、13世紀と思われる。404は口縁端部外面が、くの字状に張り出し、薄緑がかかった自然釉がかかる。神出・魚住窯産で、13世紀と思われる。

#### 包含層〔第VII～XIII層〕出土 越州青磁（第45図）

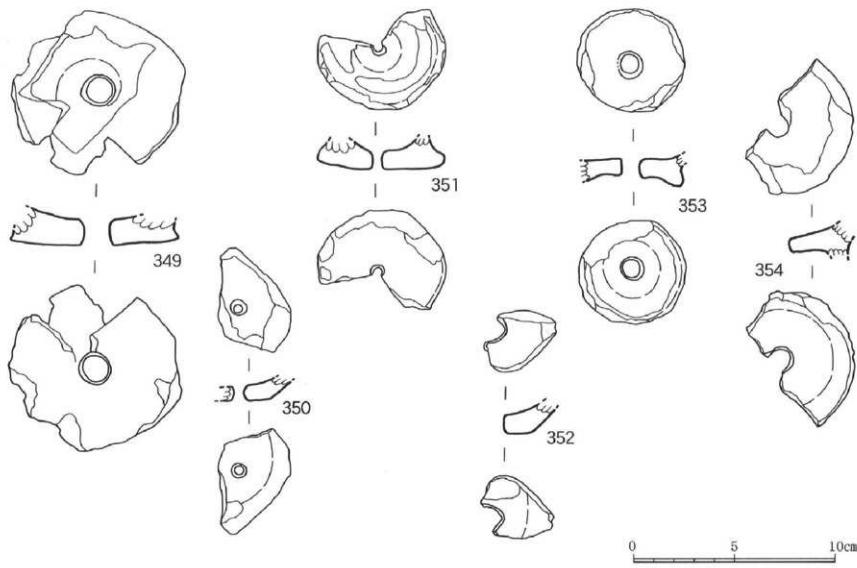
405～419は、中国において唐・五代時代に生産された越州窯系青磁である。405は甕であり、釉の発



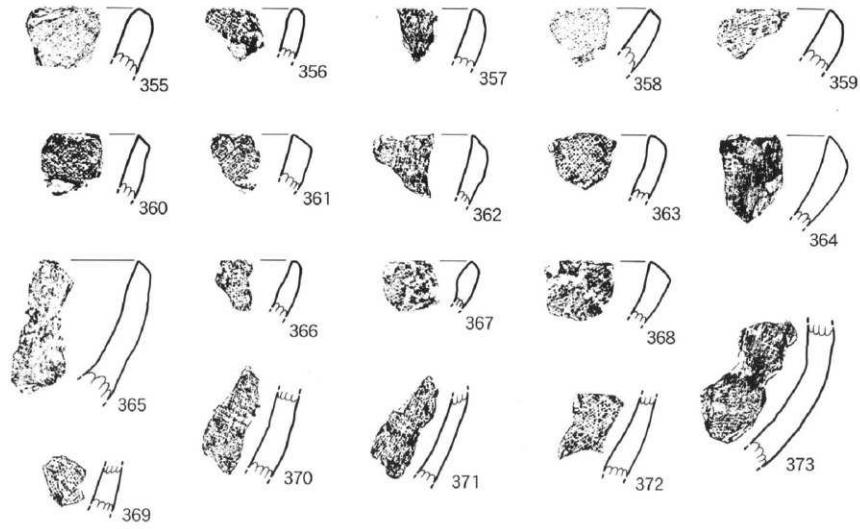
第38図 包含層(第VII～XIII層)出土 土師器(墨書き)実測図



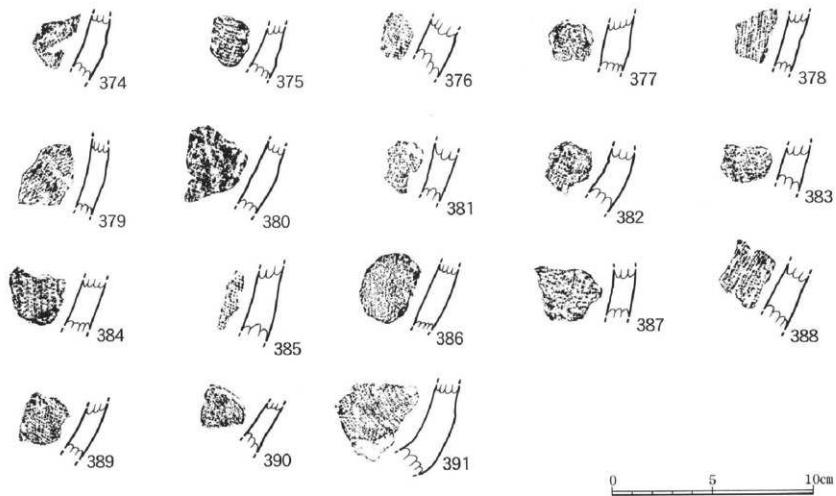
第39図 包含層(第VII～XIII層)出土 土師器(刻書き)実測図



第40図 包含層(第VII～XIII層)出土 土師器〈紡錘車〉実測図



第41図 包含層(第VII～XIII層)出土 土師器〈焼塙壺〉実測図(1)

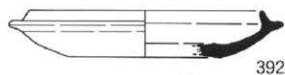


第42図 包含層〔第VII～XIII層〕出土 土師器〈焼塩壺〉実測図(2)

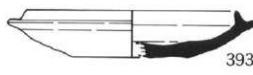
色は悪く、体部外面下位は無釉である。第II類(粗製品)である。406は椀であり、釉の発色は悪く、一部被熱により銀化しており、口縁端部には輪花を有する。II-2 b類と思われる。407は椀と思われ、釉の発色は悪く、第II類(粗製品)である。408は椀であり、釉の発色は悪く、胎土もやや粗く黒色物を含む。II-2類である。409は408と同様である。410は椀であり、釉の発色は悪く、口縁部が直に立ち上がる。II-2 b類で、9世紀後半～10世紀前半と思われる。411は椀であり、釉の発色は良好で、体部外面下位は無釉であり、内面には目跡をのこす。I-5類と思われる。412は椀であり、釉の発色は良好で、体部外面にヘラ押圧縦線文が施されている。I-2 b類と思われる。413は椀であり、釉の発色は良好である。I-2類と思われる。414は壊と思われ、平底で口縁部は稜花を有していたと考える。壊I類と思われる。415は椀であり、平底で、体部外面下部および底部をヘラケズリしており、I-5類と思われる。416は椀であり、釉の発色は良好である。輪状高台を有しており、全面施釉後、高台置付の釉を削り取っている。また、体部内面下部と高台置付に目跡をのこす。I-2 a類である。417は大椀と思われる。釉の発色は良好であり、輪状高台を有し、高台置付の外側を斜めにカットしている。また、全面施釉後、高台置付の釉を削り取っており、体部内面下部と高台置付に目跡をのこす。I-2 a類の大型品と思われる。418は椀であり、釉の発色は良好で、輪状高台を有しており、全面施釉後、高台置付の釉を削り取っている。また、体部内面下部と高台置付に目跡をのこす。I-2 a類である。419は椀であり、釉の発色は悪く、体部外面中位以下には施釉されておらず、円盤状の高台を有し、底部外面はヘラナデされている。また、底部内面に目跡をのこす。II-2 b類である。

#### 包含層〔第VII～XIII層〕出土 緑釉陶器 (第46図)

420～422は緑釉陶器である。緑釉陶器は、緑色の呈色剤として銅化合物を加えた鉛釉を釉薬として用



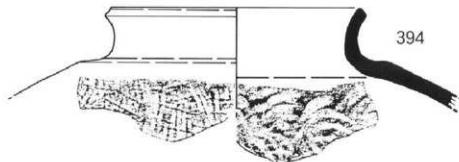
392



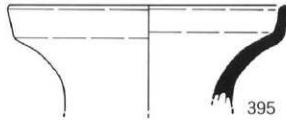
393



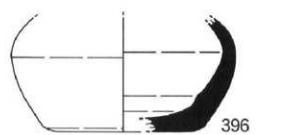
394



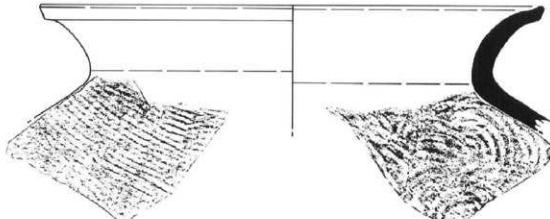
394



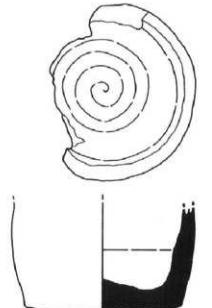
395



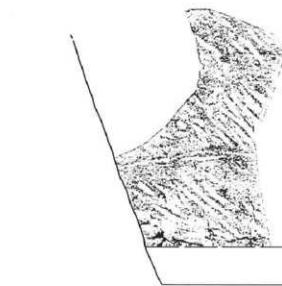
396



398

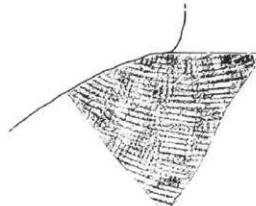


397



399

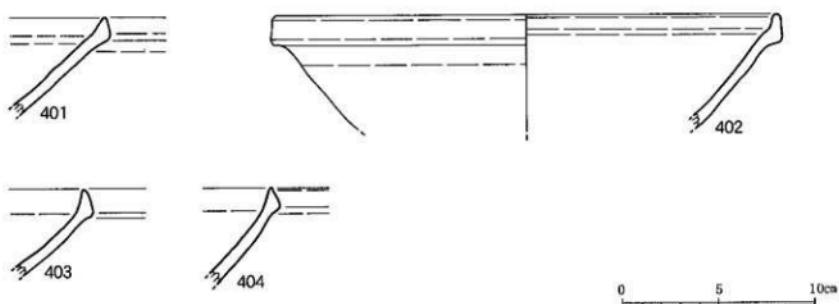
0 5 10cm



400

0 5 10cm

第43図 包含層[第VII～XⅢ層]出土 須恵器 実測図



第44図 包含層〔第VII～X III層〕出土 東播系須恵器 実測図

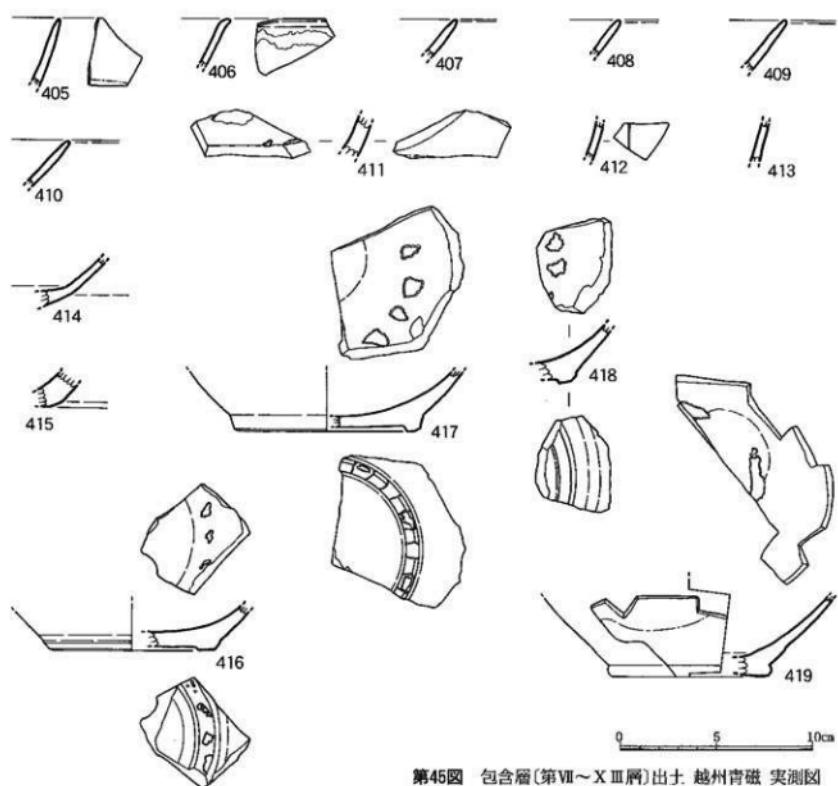
い、酸化焰焼成した国産陶器である。平安時代には、越州窯系青磁を志向した椀・皿類を中心として、平安京近郊の洛北・洛西窯や東海地方などで生産が行われた。420は皿の口縁部であり、口縁端部外面に、凹線状の弱いくぼみをもち、釉は淡緑に発色しており、内外面共にミガキが施されている。京都ないし東海産と思われる。421は口縁部片で、器種は不明である。胎土は硬質で、釉は淡緑に発色しており、内外面共にミガキが施されている。京都産洛西型と思われる。422は皿であり、輪状高台を有し、高台内部は無釉である。京都産と思われる。

#### 包含層〔第VII～X III層〕出土 白磁・青白磁（第47図）

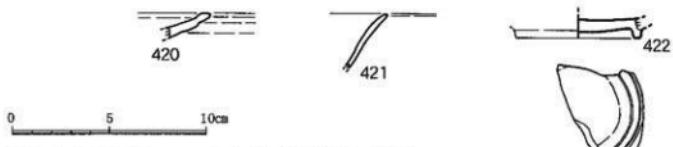
423は輪花口縁を有し、体部に5分割のヘラ押圧縦線文をもつ白磁碗である。体部外面下位は施釉されておらず、体部は丸みを帯び、口縁端部がやや外反する。碗X 1～5類で10世紀末～11世紀前半と思われる。424は白磁の小皿である。平底で、底部外面および体部外面下位の一部は無釉である。中世の産と思われる。425は青白磁の合子であり、平底で内外面共に、全面施釉されている。12世紀と思われる。

#### 包含層〔第VII～X III層〕出土 銀冶関連〈フイゴの羽口・銀治津〉（第48図）

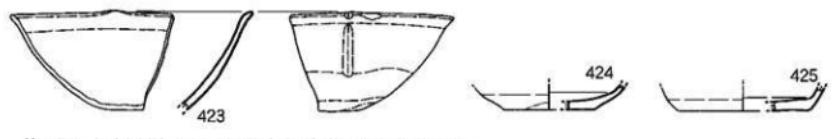
426～432はフイゴの羽口である。426は、ほぼ完形であり、先端部は淬化している。通風孔部は、内径24mmの直線状である。427は先端部片であり、端部が淬化している。通風孔部は、内径20mm（推定）の直線状である。428は先端部片であり、外面が淬化している。通風孔部は、内径20mm（推定）の直線状である。429は先端部片であり、外面が淬化している。通風孔部は、内径27mm（推定）の直線状である。430は先端部片であり、外面が淬化している。通風孔部は、内径22mm（推定）の直線状である。431は先端部片であり、外面が淬化している。通風孔部は直線状である。尚、通風孔径は不明である。432は先端部片であり、端部が淬化している。通風孔部は内径27mm（推定）の直線状である。433は平面、梢円形をした椀形銀治津であり、表面に木炭痕を数ヶ所確認できる。434は平面、不整多角形をした椀形銀治津で、側面2面が破面であり、全体に軽石および小礫を含む。435は平面、不整三角形をした椀形銀治津で、側面2面が破面であり、全体に軽石および小礫を含む。436は平面、不整梢円形をした椀形銀治津であり、側面に破面を1面確認でき、表面全体が微細な木炭で覆われている。433～436はいずれも表面に赤錆を帶びており、軽量である。



第45図 包含層(第VII～XIII層)出土 越州青磁 実測図

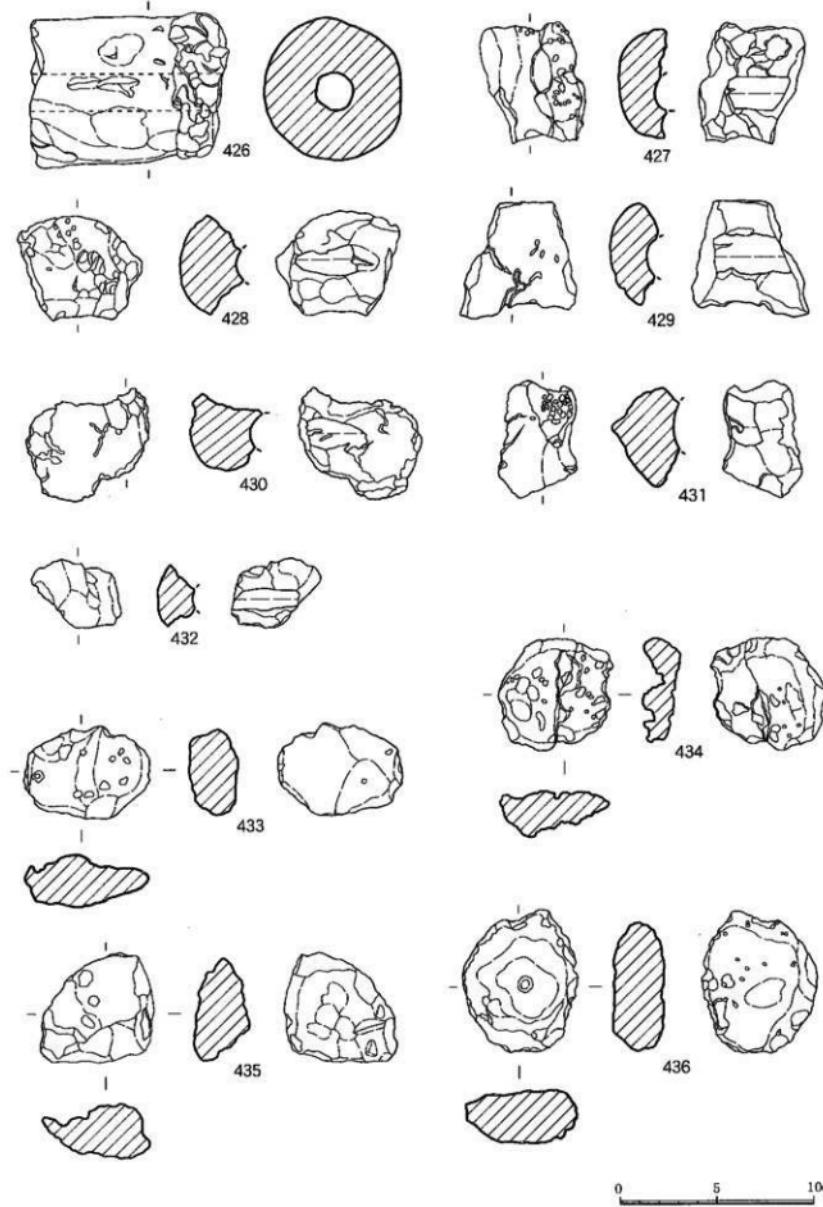


第46図 包含層(第VII～XIII層)出土 緑釉陶器 実測図



第47図 包含層(第VII～XIII層)出土 白磁・青白磁 実測図

0 5 10cm



第48図 包含層(第VII~XⅢ層)出土 錫冶関連〈フイゴの羽口・錫冶滓〉実測図

#### 包含層〔第VII～X III層〕出土 木製品〈曲物〉（第49図）

437は曲物の側板であり、内面に、曲げ加工を容易にする為と思われるスジ状で縦方向の浅い切り込みが施されている。438は曲物の側板と思われるが、底板の可能性もある。穿孔が3ヶ所認められ、その内2ヶ所には、結合に用いたと思われる桜の樹皮を遺存している。439は曲物の側板であり、板の端部を重ね合わせ、穿孔し、桜の樹皮によって結合している。これは、櫛閉じと呼ばれる技法である。440・441は曲物の側板であり、内面にスジ状で縦方向の浅い切り込みをのこす。442は曲物の側板であり、内面にスジ状で斜め方向の浅い切り込みをのこす。443は曲物の底板と思われる。穿孔が1ヶ所みられ、結合に用いられた桜の樹皮を遺存しており、一部炭化している。444は円形曲物の底板であり、上面の周辺部には、側板をはめ込む為の溝が彫られている。穿孔が2ヶ所みられ、側板の固定に用いられた桜の樹皮が遺存している。また下面には「大」の線刻が施されている。445は曲物の側板であり、内面の一ヶ所に、スジ状で縦方向の浅い切り込みを施している事から、方形の曲物と思われる。穿孔が5ヶ所みられ、内、4ヶ所に、結合に用いられた桜の樹皮が遺存している。

#### 包含層〔第VII～X III層〕出土 木製品〈挽物・刀子形・蓋板・他〉（第50図）

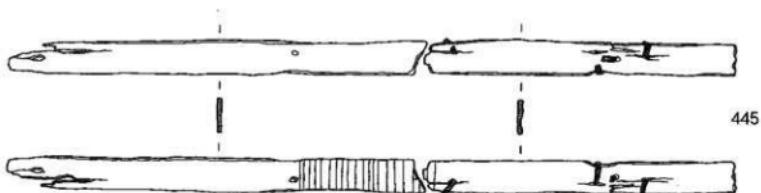
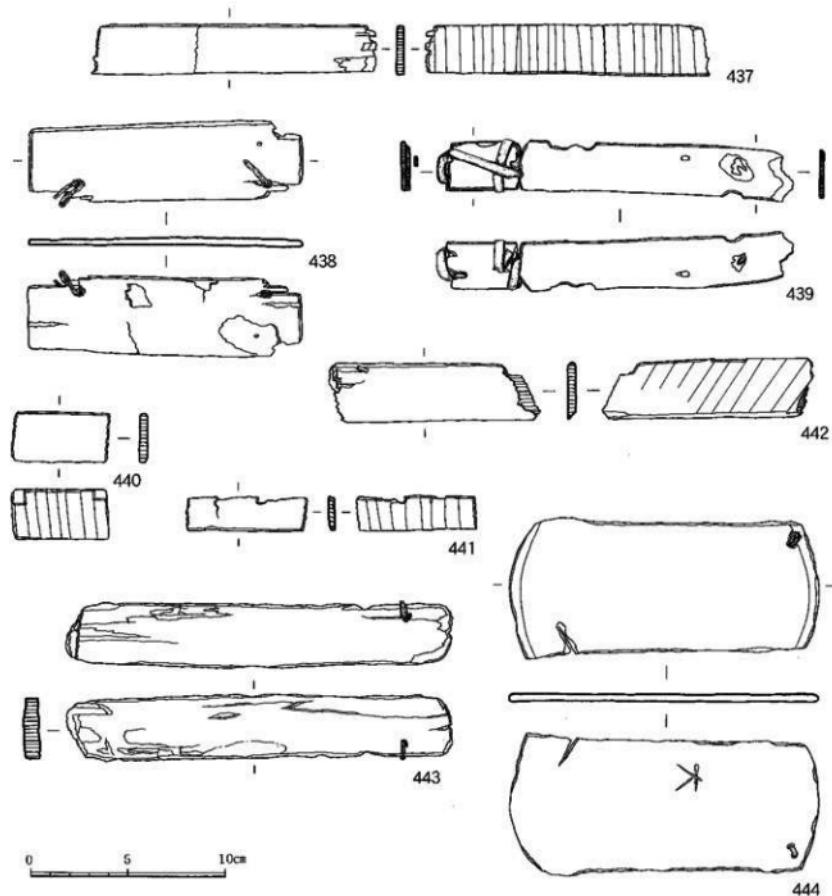
446はロクロを用いて引き作られた木器、いわゆる挽物であり、器種については桶か皿と思われる。器の一部が炭化しており、欠損部分は焼失したものと考える。内外面にロクロ引きによる工具痕を明瞭にのこし、底部外面は低い高台状に削り出されており、木地をロクロに固定する際のツメ痕が2ヶ所確認でき、また「V」字状の線刻が施されている。内面の一部および体部外面に黒色の付着物があり、黒ウルシが塗布されていた可能性がある。447はロクロ引きにより作られた挽物の皿である。底部は平底で、内外面にロクロ引きによる工具痕を明瞭にのこし、内面にはロクロのツメ痕らしき跡が1ヶ所認められる。448は刀子形木製品であり、両面に継が明瞭に認められる。正確な用途は不明であるが、祭祀具もしくは工具などが考えられる。449は取手状をした木製品であり、全体にノミによる加工痕がみられる。用途は不明であるが、形状が、湯桶の取手部分に類似している様に思える。450は蓋板であり、片側半分が欠損しており、穿孔が中心部付近に2ヶ所、周辺部に3ヶ所認められる。451は平面、楕円形で、断面形態は凸状をした木製品で、2ヶ所に内径8mm位の穿孔が認められる。用途不明品である。452は平面、長方形で5面が面取り加工されており、1面は木材の素地をのこしている。剖物の未製品で、木取り段階でないかと思われる。

#### 包含層〔第VII～X III層〕出土 木製品〈部材・樹皮〉（第51図）

453～456は薄板状の木製品であり、何かの部材であると思えるが、正確な用途は不明である。457～460は桜の樹皮である。457は幅3cmの帯状でやや丸まっており、2ヶ所に穿孔をもち、結合材として木製品に使用されていたものと思われる。458は幅1.3cm位の帯状でラセン状に巻いており、459も幅2～3cmの帯状でラセン状に巻いている。458・459は共に木製品の結合材としての素材であったと思われる。460は幅1.3cmの帯状でU字形に曲がっており、結合材として木製品に使用されていたものと思われる。461は大型の板材であり、建築部材と考えるが、正確な用途は不明である。

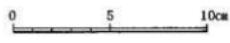
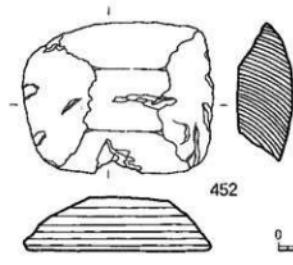
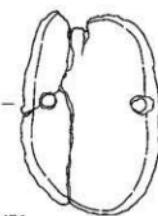
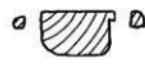
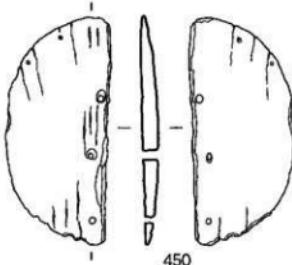
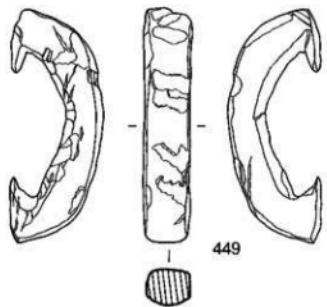
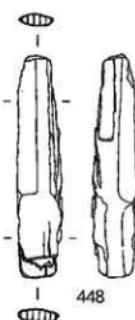
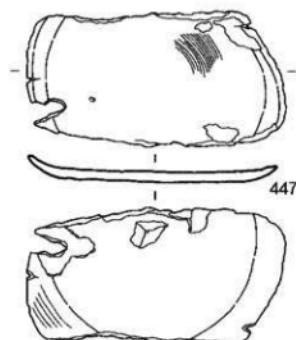
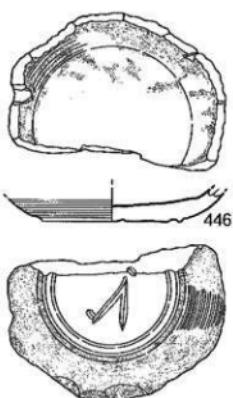
#### 包含層〔第VII～X III層〕出土 滑石製品〈石鍋〉（第52図）

462は滑石製石鍋の口縁部片で、断面不等辺台形瘤状の把手がつく。外面の一部および把手の口唇部にノミ痕跡が認められ、外面全体にススの付着がみられる。II-a-2類で、11世紀頃と思われる。



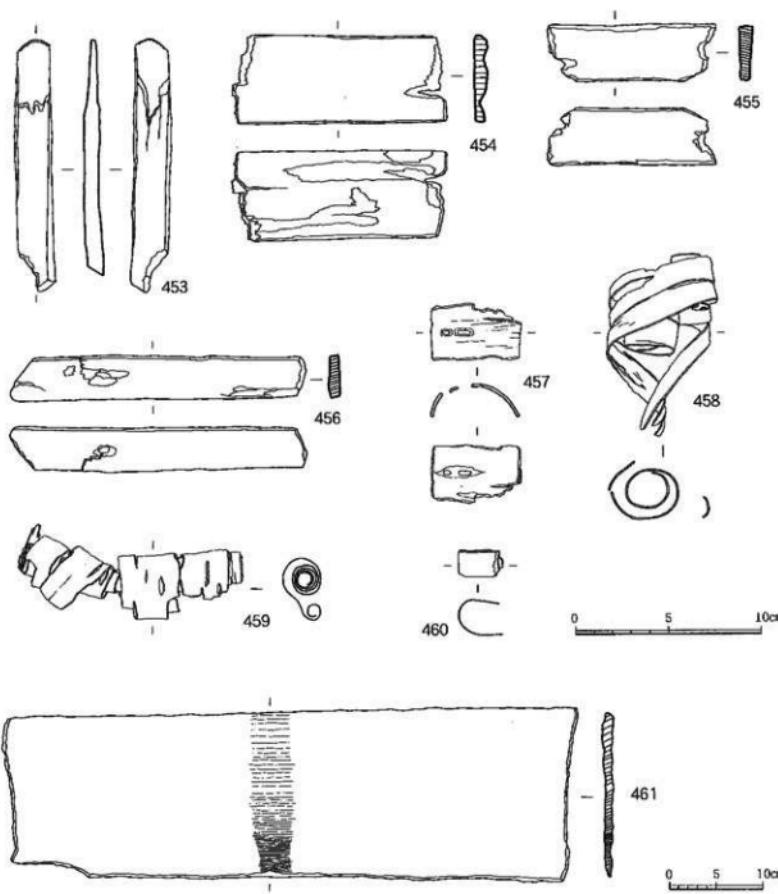
第49図 包含層(第VII~XIII層)出土 木製品〈曲物〉実測図

0 5 10cm



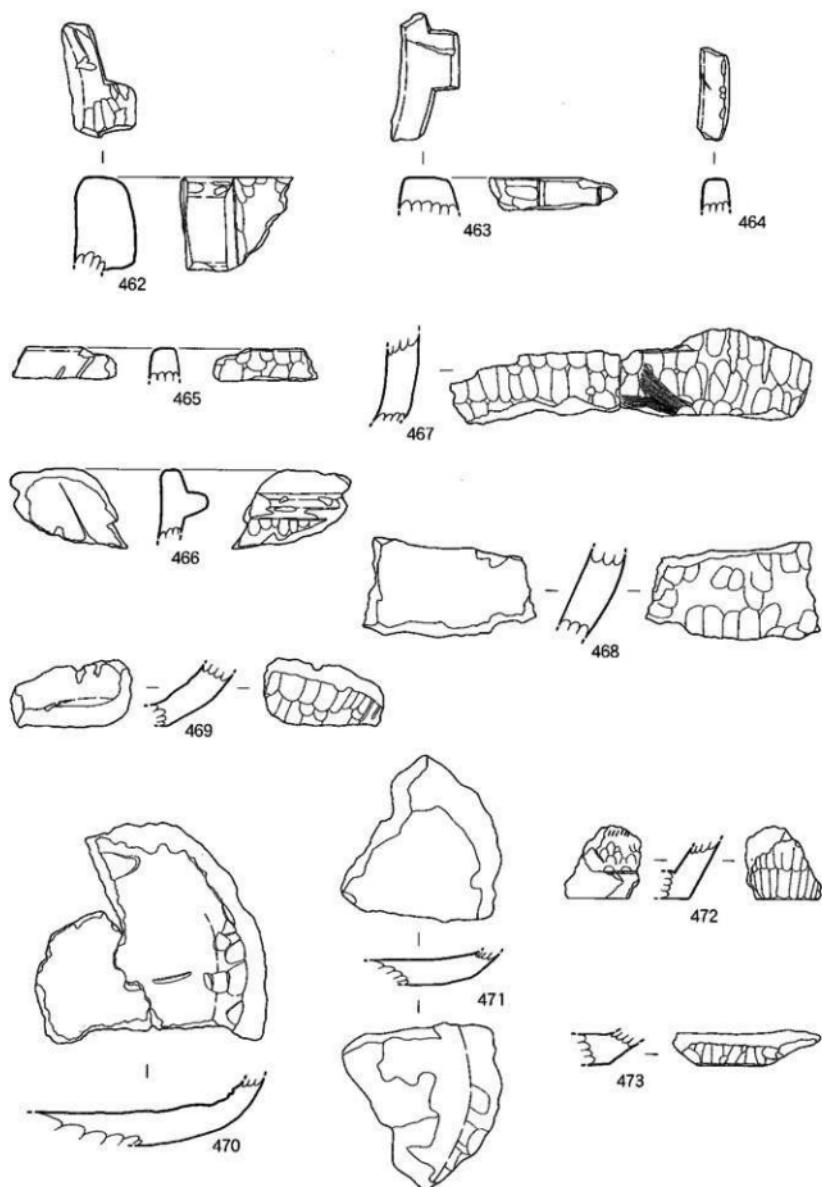
0 5 10cm

第50図 包含層(第VII~XIII層)出土 木製品(挽物・刀子形・蓋板・他) 実測図



第51図 包含層(第VII~XIII層)出土 木製品〈部材・樹皮〉実測図

463は滑石製石鍋の口縁部片で、瘤状の把手がつく。外面の一部にノミ痕跡が認められ、外面全体にススの付着がみられる。II類で、11世紀～12世紀と思われる。464は滑石製石鍋の口縁部片である。465は滑石製石鍋の口縁部片であり、外面に縦方向のノミ痕跡が認められる。466は滑石製石鍋の口縁部片であり、口縁は直立気味で、削り出しによる小形の断面台形鈎がつく。鈎の直下外面に縦方向のノミ痕跡が認められ、外面の一部にススの付着がみられる。III-a-2類で12～13世紀と思われる。467は滑石製石鍋の胴部片である。外面には縦方向のノミ痕跡があり、一部は工具により横方向に削り仕上げられている。また、外面全体にススの付着がみられる。468は滑石製石鍋の胴部片であり、外面に縦方向のノミ痕跡が認められ、ススの付着がみられる。470は滑石製石鍋の底部片であり、底部から体部への立ち上がりは、丸みを帯びている。内面の数ヶ所にノミ痕跡が認められ、炭化物の付着もみられる。全体



第52図 包含層(第VII~XⅢ層)出土 滑石製品(石器)実測図

0 5 10cm

的に仕上げが粗く、特に内面の仕上げが粗雑である。471は滑石製石鍋の底部片であり、外面の一部に縦方向のノミ痕跡が認められ、内面には炭化物の付着がみられる。472は滑石製石鍋の底部片である。底部からの立ち上がりは、鈍角であり、外面には縦方向のノミ痕跡が認められ、ススの付着もみられる。

#### 包含層〔第VII～X III層〕出土 石製品〈砥石〉（第53図）

474は平面、長方形をした砂岩製の砥石である。長軸の両端面が破面であり、他の4面が研磨痕をのこす使用面である。表・裏面に幅4mm・深さ2.5mmと幅2mm・深さ1mmの断面V字状の溝があり研磨痕をのこす。特殊な工具を研磨する際に用いられたと考える。475は平面、長方形をした砂岩製の砥石である。長軸の両端面が破面であり、他の4面が研磨痕をのこす使用面である。476は平面、四角形をした砂岩製の砥石である。側面2面が破面であり、他の4面が研磨痕をのこす使用面である。

#### 包含層〔第VII～X III層〕出土 土製品〈鍤〉（第54図）

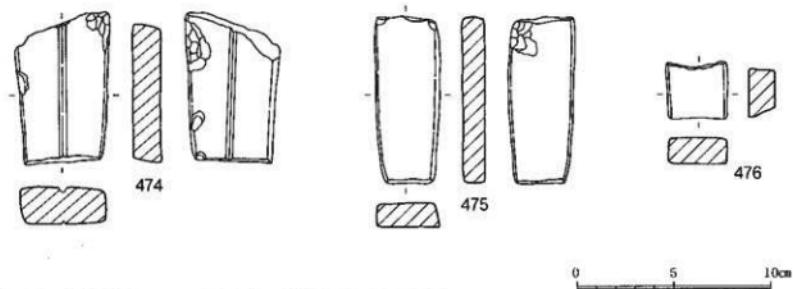
477はほぼ完形の土鍤で、穿孔径は2.5mmである。478は土鍤の完形品で、孔は端部が4mm、中心部が1mmの錐状であり、両端から穿孔されており、未貫通である。

#### 包含層〔第VII～X III層〕出土 軽石製品〈用途不明〉（第55図）

479は平面、長楕円形で面取り加工された軽石製品である。用途は不明である。480は平面、楕円形をした軽石製品であり、面取り加工され、未貫通の穿孔をもつ。用途は不明である。481は面取り加工された五角柱状の軽石製品である。形状・法量からみて、甌の支脚であった可能性がある。

#### 包含層〔第VII～X III層〕出土 石器（第56～58図）

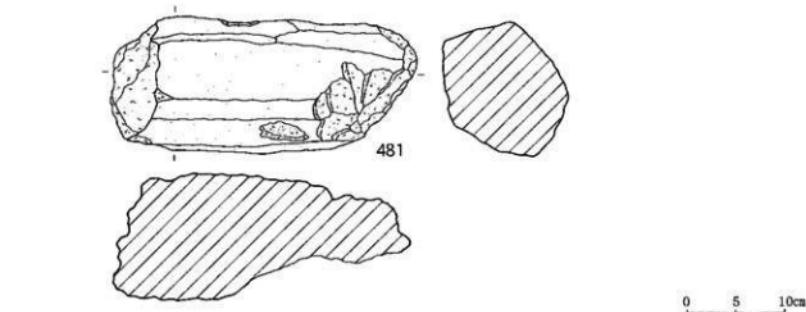
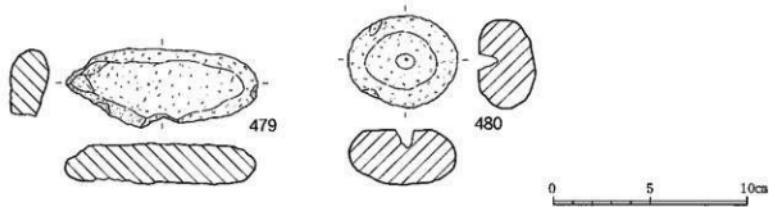
482・484・486はチャートの剥片である。483・485は黒曜石の剥片である。487は頁岩であり、一部に微弱なコーングロス（Bタイプ）が認められた。488はチャートの石核である。489は縄文時代晩期～弥生時代前期に帰属すると思われる頁岩源ホルンフェルス製の剥片石器であり、刃部に線状痕が認められる。490は頁岩製打製石斧の刃部である。491は頁岩源ホルンフェルス製扁平打製石斧の刃部である。492は頁岩源ホルンフェルス製扁平打製石斧の基部片である。493は凝灰岩製打製石斧であり、刃部先端に節理面をのこしている。基部の両側端にはツブレがみられ着柄痕跡と思われる。494・495は砂岩製敲打石である。496は凝灰岩製磨石であり、全面に磨り面が認められる。側面には、敲打痕ものこしており、敲石としても使用されている。497は凝灰岩製敲打石である。498は凝灰岩の凹縫を素材とし、側面全体および表面中央に敲打痕がみられ、中央部はくぼんでいる。499は欠損した砂岩製凹縫の端部に敲打痕がみられる。500は砂岩縫の端部に敲打痕が観察され、破損部以外にススの付着がみられる。破損は被熱によると思われる。501は棒状をした砂岩の両端部に剥離痕が認められる。502は棒状をした砂岩の端部に剥離痕が認められる。503は3面が破損した砂岩の1面に磨痕をのこし、全面にススの付着がみられる。破損後に熱を受けたものと思われる。504は3面が破損した砂岩であり、表面と片側面に磨痕が認められる。破損部以外にススの付着がみられ、破損は被熱によると思われる。505は2面が破損した砂岩で、破損部以外にススの付着がみられ、被熱により破損したと思われる。503～505は遺物の状況からみて、二次転用された集石の一部であったと思われる。506は両輝石安山岩の台石で、表面に著しい敲打痕が認められる。



第53図 包含層(第VII～XIII層)出土 石製品〈砥石〉実測図



第54図 包含層(第VII～XIII層)出土 土製品〈錺〉実測図



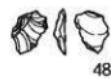
第55図 包含層(第VII～XIII層)出土 軽石製品〈用途不明〉実測図



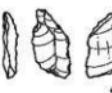
482



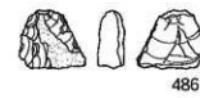
483



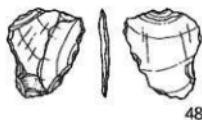
484



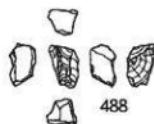
485



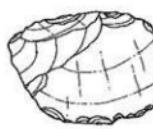
486



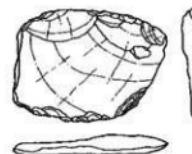
487



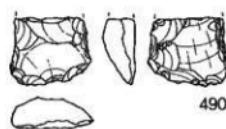
488



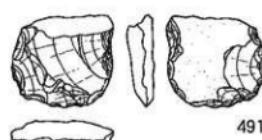
489



489



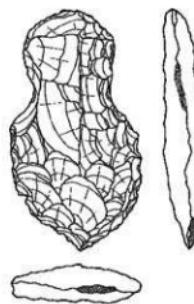
490



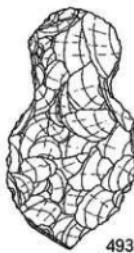
491



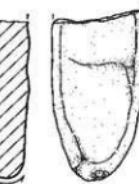
492



493



495

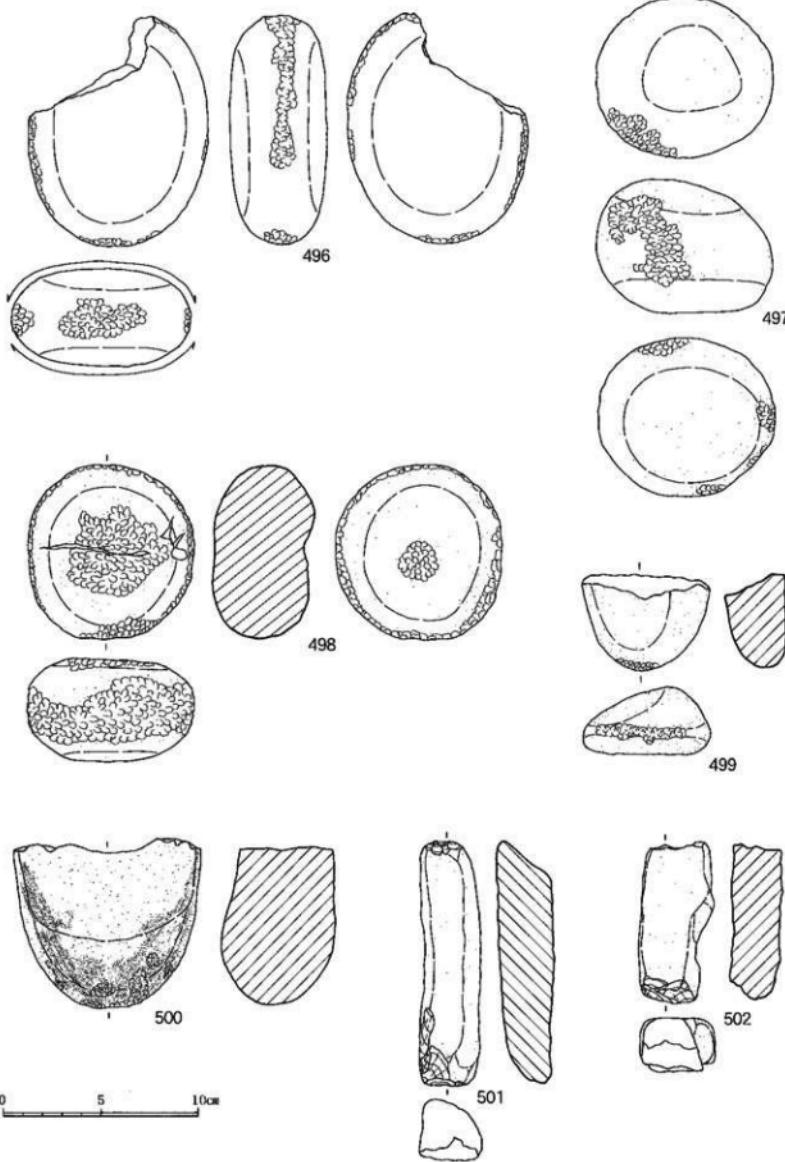


494

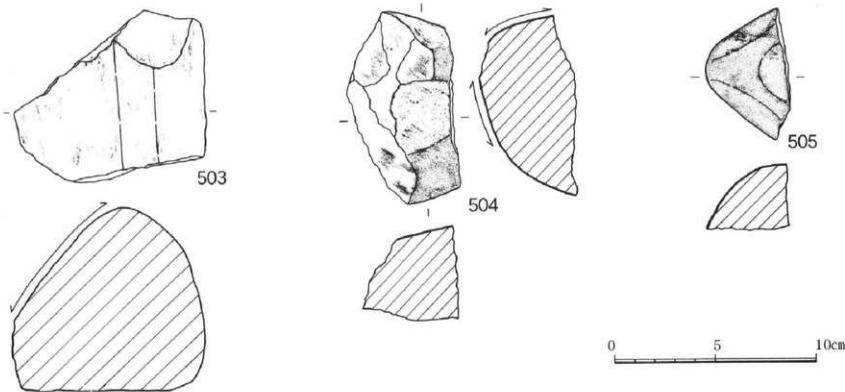


0 5 10cm

第56図 包含層(第VII~XⅢ層)出土 石器 実測図(1)



第57図 包含層(第VII～XIII層)出土 石器 実測図(2)



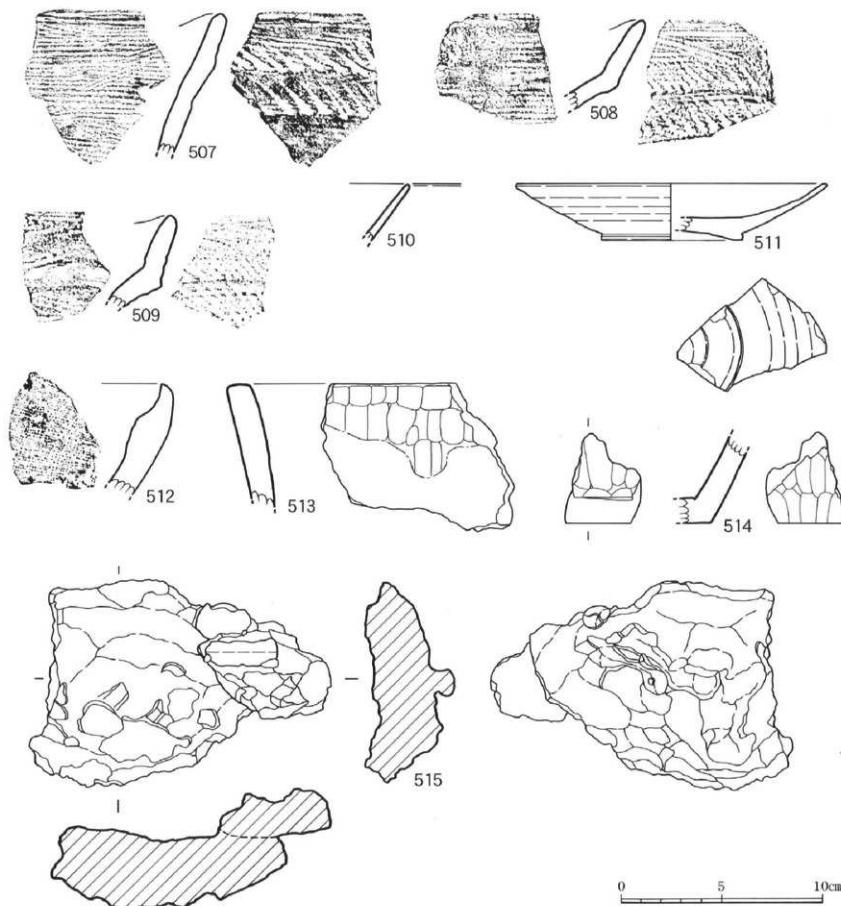
第58図 包含層(第VII～XIII層)出土 石器 実測図(3)

前記の石器類の主な使用石材の産地については、砂岩・頁岩は都城盆地周辺の産であり、ホルンフェルスは宮崎県北部か鹿児島県大隅半島(高隈山周辺)の産、チャートは宮崎県北部産、両輝石安山岩については、江内谷遺跡近隣の鹿児島県末吉町高之峰・都城市母智丘産の可能性がある。

#### 表土剥ぎ一括 [第I～V層] 出土遺物 (第59図)

下記の掲載遺物は、表土剥ぎの際に、第I～V層中から出土した遺物で、現代の耕地整理および近世の水田開発による造成段階で紛れ込んだ二次的移動による遺物である。

507～509は縄文時代後期に属する市来式土器の口縁部片であり、器種は深鉢と思われる。口縁部は、くの字状を呈し、貝殻条痕文および貝殻刺突文が施されている。510は越州窯系青磁碗の口縁部片であり、釉の発色はやや良好で、口縁部は直線的である。I～V類と思われる。511は緑釉陶器の皿である。胎土は軟陶であり、蛇ノ目高台を有する。全面施釉され、淡黄色に発色している。また、丁寧なミガキが施されている。京都産洛北型か洛西型で、9世紀第2四半期頃と思われる。512は製塩土器である焼塩壺の口縁部片である。口唇部はシャープであり、型作りの際につけた布目圧痕を留めている。513は



第59図 表土剥ぎ一括(第I～V層)出土遺物 実測図

滑石製石鍋の口縁部片である。口縁部は内湾しており、外面には、縦方向のノミ痕跡をのこす。瘤状の把手がついていたと推測され、II-a類で11世紀頃と思われる。514は滑石製石鍋の底部片であり、底面から胴部への立ち上がりはシャープである。外面に、縦方向のノミ痕跡が認められる。515は平面、不整五角形を呈し、短軸に破面をもつ楕円形鍛冶滓であり、表面に赤錆を帶び、重量感がある。端部にはファゴの羽口先端部片が融着している。

- ・製塙土器(焼塙壺)の分類は「製塙土器からみた律令期集落の様相(製塙土器の形態分類)」(小田和利 1996)に依る。
  - ・須恵器の年代は「陶邑編年」に依るものである。
  - ・陶磁器の分類は、2000太宰府市教育委員会 山本信夫「太宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-」『太宰府市の文化財第49集』に依る。
  - ・滑石製石鍋の分類については、木戸雅寿1995「石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会の「石鍋編年試案」に依った。
  - ・石器の石材については一部、都城市文化財報告書第58集「横市地区遺跡群」の『第7章 横市地区遺跡群出土の石器の石材について』を参考にした。
- 
- ・鍛冶関連遺物について、村上恭通氏(愛媛大学法学部助教授)に鑑定・御教示頂いた。
  - ・石器の使用痕分析を、山村信榮氏(大宰府市教育委員会)にして頂いた

表2 掲載遺物観察表(1)

掲載番号	種別	器種	出土場所・遺構	測定		色調		法重				備考
				外 面	内 面	外 面	内 面	粘土・ 泥和材	口幅 (長幅)	底径 (短幅)	高さ (厚さ)	
1	純文土器	浅鉢	SD01	ナデ	ミガキ	灰黄褐色	にぼい褐色	1mm以下の 粘土・砂粒				(反転復元)
2	須恵器	甕	SD01	横ナデ 平行タキ目	横ナデ 同心円当て具痕	褐灰色	にぼい褐色	8mm以下の 粘土・砂粒	21.6cm			(反転復元)
3	土師器	坏	SD01	回転ナデ	回転ナデ	にぼい黄褐色	にぼい黃褐色	ごく微小の 粘土・砂粒	12.0cm	5.9cm	4.0cm	(反転復元)
4	土師器	坏	SD01	回転ナデ ヘラ削り	回転ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	ごく微小の 粘土・砂粒	10.8cm	5.5cm	4.1cm	(一部反転復元)
5	土師器	坏	SD01	回転ナデ	回転ナデ	橙色	橙色	ごく微小の 粘土・砂粒	11.2cm	5.6cm	4.2cm	底部へラ切り
6	土師器	坏	SD01	回転ナデ	回転ナデ	にぼい褐色	褐色	ごく微小の 粘土・砂粒	11.5cm	5.5cm	4.0cm	(反転復元) 底部へラ切り
7	土師器	坏	SD01	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	2mm以下の 粘土・砂粒	12.0cm	5.4cm	5.0cm	(一部反転) 底部へラ切り
8	土師器	坏	SD01	回転ナデ ヘラ削り	回転ナデ	橙色	橙色	ごく微小の 粘土・砂粒	12.8cm	6.9cm	5.2cm	底部へラ切り
9	土師器	坏	SD01	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	ごく微小の 粘土・砂粒		5.6cm		底部へラ切り
10	土師器	坏	SD01	回転ナデ ヘラ削り	回転ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	ごく微小の 粘土・砂粒		6.3cm		底部へラ切り
11	土師器	高台付椀	SD01	回転ナデ	回転ナデ	にぼい褐色	橙色	3mm以下の 粘土・砂粒	14.5cm	9.2cm	6.1cm	
12	土師器	高台付碗	SD01	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	ごく微小の 粘土・砂粒		8.8cm		
13	土師器	高台付椀	SD01	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色	にぼい褐色	ごく微小の 粘土・砂粒		9.3cm		
14	土師器	高台付碗	SD01	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色	にぼい黄褐色	ごく微小の 粘土・砂粒		9.5cm		
15	土師器	高台付碗	SD01	回転ナデ	回転ナデ	にぼい黄褐色	にぼい黄褐色	ごく微小の 粘土・砂粒		9.9cm		(一部反転復元) 内黒?
16	土師器	高台付碗	SD01	回転ナデ	回転ナデ	橙色	橙色	3mm以下の 粘土・砂粒		8.9cm		(一部反転復元)
17	土師器	甕	SD01	横ナデ 丁寧なナデ	横ナデ ヘラ削り	黑褐色	にぼい褐色	3mm以下の 粘土・砂粒	18.6cm			(反転復元) スス付着
18	土師器	甕	SD01	横ナデ	横ナデ	灰黄褐色	にぼい黄褐色	4mm以下の 粘土・砂粒	17.0cm			(反転復元)
19	土師器	甕	SD01	横ナデ ヘラナデ	横ナデ ヘラ削り	にぼい赤褐色	にぼい赤褐色	5mm以下の 粘土・砂粒	30.0cm			(反転復元)
20	土師器	甕	SD01	横ナデ	横ナデ 一部ケズリ	にぼい黄褐色	にぼい黄褐色	ごく微小の 粘土・砂粒				
21	土師器	甕	SD01	横ナデ	横ナデ	浅黄褐色	黄褐色	5mm以下の 粘土・砂粒				
22	土師器	甕	SD01	横ナデ	横ナデ ケズリ	にぼい褐色	にぼい褐色	5mm以下の 粘土・砂粒				スス付着
23	土師器	焼塙甕	SD01	ナデ	布目压痕	橙色	橙色	5mm以下の 粘土・砂粒				
24	土師器	焼塙甕	SD01	ナデ	布目压痕	橙色	橙色	ごく微小の 粘土・砂粒				
25	土師器	燒塙甕	SD01	ナデ	布目压痕	橙色	橙色	ごく微小の 粘土・砂粒				
26	土師器	燒塙甕	SD01	ナデ	布目压痕	橙色	橙色	ごく微小の 粘土・砂粒				

表3 掲載遺物観察表(2)

掲載番号	種別	器種	出土場所・地層	測定		色調		粘土・ 漂和材	法規			備考
				外一面	内一面	外一面	内一面		口径 (直角)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	
27	土師器	焼塗漆	SD01	ナテ	布目狂痕	橙色	橙色	3mm以下の 鉱物・砂粒				
28	土師器	焼塗漆	SD01	ナテ	布目狂痕	にぼい褐色	橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒				
29	土師器	焼塗漆	SD01	ナテ	布目狂痕	橙色	褐色	5mm以下の 鉱物・砂粒				
30	鍛冶関連	坩堝	SD01	—	—	黒灰色	—	5mm以下の 鉱物・砂粒				
31	鍛冶関連	パイロ炉	SD01	ナテ	—	—	—	3mm以下の 鉱物・砂粒				
32	鍛冶関連	椭形 鋸治炉	SD01	—	—	黒褐色	—	—	4.5cm	4.0cm	1.5cm	30.0g
33	土師器	环	SD02	回転ナデ ヘラ割り	回転ナデ	にぼい褐色	にぼい黃褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒	11.4cm	6.0cm	5.3cm	底部へラ切り
34	土師器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	褐色	橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒	11.9cm	4.6cm	4.9cm	底部へラ切り
35	土師器	环	SD02	回転ナデ ヘラ割り	回転ナデ	橙色	橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒	—	5.7cm	5.3cm	
36	土師器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒	12.6cm	4.5cm	5.3cm	
37	土師器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒	12.0cm	4.6cm	5.4cm	底部へラ切り
38	土師器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色	橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒	11.3cm	5.4cm	5.1cm	底部へラ切り
39	土師器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒	12.0cm	4.6cm	5.1cm	底部へラ切り
40	土師器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒	12.1cm	5.0cm	5.2cm	(一部反転) 底部へラ切り
41	土師器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	橙色	橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒	11.7cm	4.7cm	4.4cm	(一部反転) 底部へラ切り
42	土師器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒	11.3cm	5.0cm	4.6cm	(反転復元) 底部へラ切り
43	土師器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色	橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒	11.1cm	4.5cm	4.6~ 4.7cm	
44	土師器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	にぼい黃褐色	にぼい黃褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒	11.1cm	4.7cm	4.5~ 4.9cm	(反転復元) スス・炭化物
45	土師器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒	12.2cm	5.0cm	4.3~ 5.0cm	
46	土師器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	にぼい黃褐色	にぼい黃褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒	12.8cm	5.0cm	5.2~ 5.6cm	底部へラ切り
47	土師器	坏か焼	SD02	回転ナデ	回転ナデ	橙色	黄褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒	19.5cm			
48	土師器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒	—	4.6cm		(一部反転) 底部へラ切り
49	土師器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	橙色	橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒	—	5.2cm		底部へラ切り
50	土師器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	橙色	橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒	—	5.0cm		底部へラ切り 「十」の線刻
51	土師器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色	にぼい黃褐色	5mm以下の 鉱物・砂粒	—	4.8cm		底部へラ切り
52	土師器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒	—	5.6cm		底部へラ切り

表4 掲載遺物観察表(3)

掲載 番号	種別	器種	出土・場所	調 型		魚 刺		地土・ 調和材	法 番			備考
				外 面	内 面	外 面	内 面		口径 (長軸)	底径 (短軸)	高さ (厚さ)	
53	土 器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	4mm以下の 鉱物・砂粒	6.4cm			底部へラ切り 円盤貼付
54	土 器	环?	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒	5.2cm			円盤貼付
55	土 器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	橙色	橙色	1mm以下の 鉱物・砂粒	6.0cm			底部へラ切り
56	土 器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	におい褐色	におい褐色	1mm以下の 鉱物・砂粒	7.6cm			(一部反転) 底部へラ切り
57	土 器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒	7.2cm			(反転復元)
58	土 器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒	6.4cm			
59	土 器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒	6.4cm			底部へラ切り
60	土 器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	におい褐色	におい褐色	1mm以下の 鉱物・砂粒	6.2cm			(一部反転) 底部へラ切り
61	土 器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	におい褐色	におい褐色	1mm以下の 鉱物・砂粒	6.3cm			底部へラ切り
62	土 器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒	5.7cm			(一部反転) 底部へラ切り
63	土 器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒	6.2cm			
64	土 器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	におい褐色	におい褐色	1mm以下の 鉱物・砂粒	5.1cm			(一部反転) 底部へラ切り
65	土 器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒	6.2cm			底部へラ切り
66	土 器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒	6.1cm			(反転復元) 底部へラ切り
67	土 器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒	7.9cm			底部へラ切り
68	土 器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	におい褐色	におい褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒	5.2cm			
69	土 器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	におい褐色	明闇灰色	ごく微小の 鉱物・砂粒	5.4cm			底部へラ切り
70	土 器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒	6.2cm			
71	土 器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒	5.8cm			(一部反転)
72	土 器	环	SD02	回転ナデ	回転ナデ	におい褐色	黄灰色	ごく微小の 鉱物・砂粒	6.7cm			
73	土 器	高台付輪?	SD02	回転ナデ	回転ナデ	-	-	ごく微小の 鉱物・砂粒	5.7cm			酸化鉄付着の為 色調不明
74	土 器	高台付輪	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒	14.7cm	8.0cm	8.0cm	(一部反転) 高台貼付裏
75	土 器	高台付輪	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	4mm以下の 鉱物・砂粒	7.9cm			(一部反転)
76	土 器	高台付輪	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙色	橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒	7.4cm			(一部反転)
77	土 器	茎	SD02	回転ナデ	-	橙色	橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒	32.0cm			酸化鉄付着の為 調査不明
78	土 器	要	SD02	横ナデ	-	橙色	におい褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒	-			酸化鉄付着の為 調整不明

表5 掲載遺物観察表(4)

地図番号	種別	器種	出土場所・遺物	四 面		色 調		地土・材 混和物	法 離			備 考
				外 面	内 面	外 面	内 面		口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	
79	土師器	甕	SD02	横ナデ?	縦方向のケズリ	におい褐色	褐色	4mm以下の 鉱物・砂粒				
80	土師器	甕	SD02	横ナデ	横ナデ	褐色	褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒				スス付着
81	土師器	甕	SD02	横ナデ	横ナデ	浅黄色	灰黄色	ごく微小の 鉱物・砂粒				
82	土師器	甕	SD02	回転ナデ 上方向のケズリ		浅黄褐色	淡黄褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒	27.0cm			
83	土師器	甕	SD02	-	-	褐灰色	灰黄褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒				酸化鉄付着の為 調整不明
84	土師器	甕	SD02	-	-	褐色	褐色	4mm以下の 鉱物・砂粒				酸化鉄付着の為 調整不明
85	土師器	甕	SD02	回転ナデ	回転ナデ	淡褐色	淡褐色	4mm以下の 鉱物・砂粒	29.7cm			
86	土師器	甕	SD02	横ナデ	横ナデ ケズリ	におい褐色	褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒				
87	土師器	甕	SD02	横ナデ 縦方向のミガキ	横ナデ ケズリ	におい褐色	褐色	7mm以下の 鉱物・砂粒				
88	土師器	甕	SD02	横ナデ	-	褐灰色	褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒				スス付着
89	土師器	甕	SD02	横ナデ	-	褐灰色	褐灰色	9mm以下の 鉱物・砂粒				スス付着
90	土師器	甕	SD02	横ナデ	横ナデ	灰黄褐色	浅黄褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒				スス付着
91	土師器	甕	SD02	横ナデ	-	浅黄褐色	浅黄褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒				酸化鉄付着の為 調整不明
92	土師器	甕	SD02	-	-	黒褐色	浅黄褐色	5mm以下の 鉱物・砂粒				酸化鉄付着の為 調整不明
93	土師器	甕	SD02	不定方向のナデ ケズリ		褐色	褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒				スス付着
94	土師器	甕	SD02	横ナデ	横ナデ	褐灰色	褐灰色	ごく微小の 鉱物・砂粒				スス付着
95	土師器	甕	SD02	横ナデ	横ナデ	におい褐色	におい褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒				
96	土師器	甕	SD02	横ナデ	横ナデ	褐色	褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒				
97	土師器	紡錘車	SD02	-	-	-	-	ごく微小の 鉱物・砂粒	6.0cm			酸化鉄付着の為 調整不明
98	黒色土器	高台付輪	SD02	回転ナデ へう削り	ミガキ	淡黄褐色	黑色	ごく微小の 鉱物・砂粒	5.7cm			内墨
99	黒色土器	高台付輪	SD02	回転ナデ	ミガキ	褐色	黑色	ごく微小の 鉱物・砂粒				内墨
100	土師器	拂塗甕	SD02	ナデ	布目江痕	褐色	褐色	1mm以下の 鉱物・砂粒				
101	土師器	拂塗甕	SD02	ナデ	布目江痕	褐色	褐色	5mm以下の 鉱物・砂粒				
102	須恵器	瓶?	SD02	回転ナデ	回転ナデ	におい黃褐色	灰黄色	ごく微小の 鉱物・砂粒	7.7cm			漆付着
103	須恵器	甕	SD02 W-X1層	横ナデ	同心円当て具痕	灰色	灰オリーブ色	稍良	17.5cm			(反転後元)
104	須恵器	甕	SD02	横ナデ 格子目タタキ	横ナデ	黄灰色	黄灰色	4mm以下の 鉱物・砂粒	9.8cm			(反転復元)

表6 掲載遺物観察表(5)

掲載 番号	種別	器種	出土 場所・遺構	鋼 鑄		色 調		粘土 混和材	法 量			備考
				外 面	内 面	外 面	内 面		口徑 (設軸)	底径 (規軸)	高さ (厚さ)	
105	須恵器	鉢(平底) X-X-1	SD02	平行タキ	指ナデ 横ナデ	灰褐色	灰褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒	15.8cm			(反転復元) 指頭部あり
106	土師器	环かぬ	SD02	回転ナデ	回転ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	1mm以下の 鉱物・砂粒	12.1cm			(反転復元) 墨書きあり
107	土師器	环かぬ	SD02	回転ナデ	回転ナデ	橙色	橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒				墨書きあり
108	土師器	环かぬ	SD02	回転ナデ	回転ナデ	におい黄褐色	におい黄褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒				墨書きあり
109	錐輪陶器	瓶	SD02 X-1層	施釉	施釉	オリーブ灰色	—	褐色 (灰)	6.9cm			内面に墨付着 京都府洛西町
110	越州青磁	碗	SD02	施釉	施釉	灰オーブ色	オリーブ色	灰黄褐色 (紅)				II類
111	越州青磁	碗	SD02	施釉	施釉	灰オーブ色	灰モリーブ色	褐色 (紅)				II-2 b類
112	越州青磁	碗	SD02	施釉	施釉	灰白色	灰白色	灰白色 (紅)				II-2類?
113	銀治開連	フイゴの扣	SD02	ナデ	—	—	—	3mm以下の 鉱物・砂粒				
114	銀治開連	梯形 銀治連	SD02	—	—	黒褐色	黒褐色	5mm以下の 鉱物・砂粒	8.3cm	6.7cm	3.0cm	210g
115	土師器	瓶	SD02	ナデ	—	におい橙色	橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒				
116	手捏土器	—	SD02	—	—	灰白色	におい黄褐色	3mm以下の 鉱物・砂粒	6.0cm	3.0cm	4.0cm	(反転復元) 指頭部あり
117	縄文土器	深鉢	SF01	貝殻条痕 貝殻刺突文	不定方向のハケメ	におい橙色	におい赤褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒				市来式
118	縄文土器	浅鉢	SD04	粗織痕	ミガキ	橙色	におい黄褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒				繩布庄模
119	土師器	甕	SD03	横ナデ	横ナデ ケズリ	におい橙色	灰黄色	3mm以下の 鉱物・砂粒				スス付着
120	土師器	壺	SD05	回転ナデ	回転ナデ	淡黄色	浅黄褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒				底部へラ切り
121	黒色土器	高台付輪	SF01	ミガキ	回転ナデ	浅黄褐色	黑色	ごく微小の 鉱物・砂粒	8.0cm			(一部反転) ヘラ切り 内黒
122	須恵器	盃	SF01 V層	回転ナデ	回転ナデ	黃灰色	灰黄褐色	3mm以下の 鉱物・砂粒	8.2cm			底部へラ切り
123	縄文土器	深鉢	X-II層	ナデ	ナデ	におい橙色	黒褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒				平塗式
124	縄文土器	深鉢	X-II層	貝殻刺突文	横方向の貝殻条痕	におい橙色	におい橙色	ごく微小の 鉱物・砂粒				市来式
125	縄文土器	鉢	X-II層	ナデ	ナデ	褐灰色	におい黄褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒				孔列文
126	縄文土器	—	X-II層	ナデ	ナデ	黒褐色	灰褐色	ごく微小の 鉱物・砂粒				
127	縄文土器	鉢	X-II層	不定方向のナデ ケズリ後縁ナデ	横ナデ	におい橙色	におい橙色	3mm以下の 鉱物・砂粒				黒川式 ヒレ状突起
128	縄文土器	浅鉢	VII層	横ナデ 粗織痕	ケズリの横ナデ	灰白色	黄灰色	3mm以下の 鉱物・砂粒	36.6cm			繩布庄模
129	縄文土器	浅鉢	X-I層	指オサエ 横ナデ	横方向のミガキ	におい橙色	におい橙色	2mm以下の 鉱物・砂粒				スス付着
130	縄文土器	浅鉢	X-I層	横ナデ	横方向のハケメ	におい黄褐色	におい黄褐色	4mm以下の 鉱物・砂粒				スス付着